花葉2008 No.27（通巻第28号）　平成20年12月10日発行

花　葉

2008
No.27

花葉会発行

✳✳✳ 私の提案 ✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳

学部創立100周年を迎えて思うこと

鈴　木　邦　彦

来年、園芸学部は創立100周年を迎える。100周年記念事業会に検討委員として関わったが、改めて、私の卒業後から今までの自分が歩んできた道を振り返ってみたいと思う。

私は、昭和44年に園芸学部総合農学科、営農気象学研究室を卒業、西武百貨店に入社した。当時、注目を浴びつつあった新規事業としてグリーンビジネスプロジェクトに参加し、園芸部を立ち上げる。

また、舞鶴市にある西武舞鶴農場に舞鶴植物研究所を設立。中国から唐つばきの原種を導入し、国内外のつばきの品種1500種、20,000本をもつ日本有数のつばき園オープンに関わる。そして、1990年大阪で開催された「花と緑の博覧会」に併せて舞鶴市に「国際つばき大会」を誘致することができた。

さらに、その後籍をおいた園芸趣味愛好家の団体である英国王立園芸協会日本支部（RHSJ）の運営では、会員に向けてのセミナー・講演会・見学会などを数多く行い、園芸普及に尽力する事ができた。

私がこうした活動を行うことができたのも、一重に専門分野における諸先輩方の助言やお力添えがあったからだと思う。

以前、卒業生を対象に行ったアンケートで、『問；千葉大学でのキャンパスライフから得たもので一番大きなものは何ですか』に、「友人とのネットワーク（52.8％）」、「授業・研究で学んだことが現在の仕事に生かせている（52.3％）」という結果がでていた。私自身、友人、諸先輩方とのネットワークのおかげで様々な困難を乗り越えることができ、大学で学んだことが仕事に大いに役立っている。

しかし、このような結果もでていた。『問；千葉大学へ不満を感じたことはありますか』の答えに、「はい（57.7%）」。その理由として一番多かったのが、「就職支援が弱い（43.3%）」ということであった。

これから,ますます自然環境保護に目が向けられている昨今、このような不満が出てしまうことは非常に残念に思う。園芸学部という専門性・特殊性を生かした活躍の場が開かれることを期待したい。

私も還暦を過ぎ、最近では毎月第1、第3土曜日に園芸学部構内の清掃、草刈りなどのボランティアにも参加させていただいている。少しでも、より良い大学作りに貢献できればと、今後も園芸関係分野の発展のために微力ながら協力できればと思う。

花葉
2008
NO.27

目次

私の提案　学部創立100周年を迎えて思うこと……鈴木　邦彦（1）
アジアの植物品種保護の国際調和に向けて……皿谷　俊祐（2）
色彩豊かな葉色の変化に魅せられてⅡ……横井　政人（5）
南北アメリカの花き業界の消費拡大活動【Flower For Kids】……佐無田　仁（10）
世界の花贈り事情と日本……中尾　成昭（14）
自叙伝抜粋　過渡期の花卉試験研究の一員として……村井　千里（18）
「MPS　GPA」を取得して……長岡　求（22）
千葉県立中央博物館収蔵・岩佐亮二コレクション（浮世絵）……御巫　由紀（28）
お客様が求める植物そして園芸店とは？……椎名　亜紀（32）
女性後継者として……飯田久美子（36）
表紙解説　ポンセチア……横井　政人（40）
オーストラリア　タスマニア旅行記……小泉　力（44）
2008年花葉サマーセミナー報告……久保田芳久（48）
花卉園芸学研究室レポート～サクラ最前線～……上村　文武（53）
園芸別科花組レポート～人生花色・花組みの色～……菅原　弘行（54）
花葉会賞受賞記念講演……村川　文彦（61）
花葉会賞受賞者紹介（58）　園芸学部創立100周年事業について（63）
花葉会総会（55）　花葉会会則・役員名簿（57）　会員名簿の追加と訂正（62）

禁無断転載

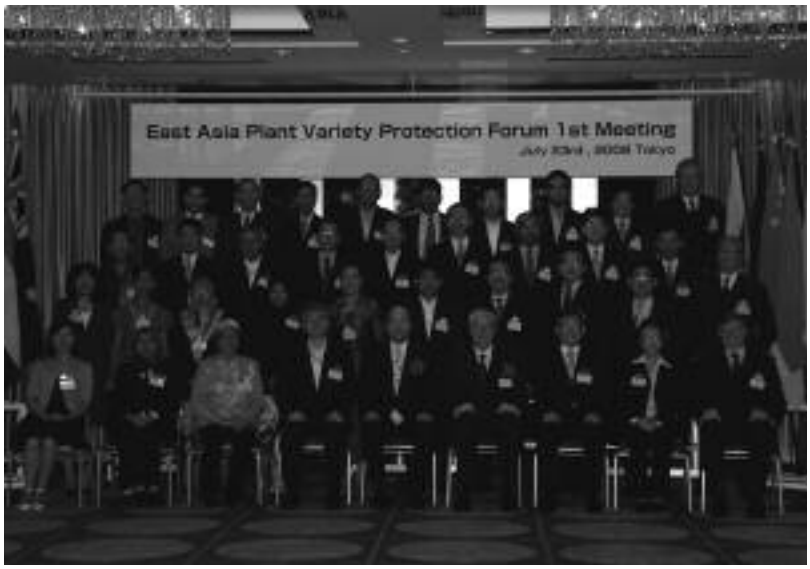
アジアの植物品種保護制度の国際調和に向けて
～東アジア植物品種保護制度の取組～

農林水産省　生産局知的財産課国際企画班
皿　谷　俊　祐

1．はじめに

植物の新品種は、一般的に、その開発のために多額の費用と長い時間が必要であるが、いったん品種が開発された後は第三者が容易に増殖できてしまう。そのため、我が国をはじめ世界の多くの国では、新品種の育成者がそれを独占的に利用できる権利を知的財産権として保護し、育種の振興を図っている。しかしアジア諸国では、植物品種保護制度の整備が遅れており、十分な保護が受けられないのが現状である。その一方で、アジア地域内では農林水産物の貿易が増大しており、日本で保護されている品種が海外で無断増殖され、その生産物や加工品が我が国へ輸入されるといった問題が起きている。

このような状況の中、植物新品種を知的財産として適切に保護していくためには、我が国のみならずアジア各国においても、国際的に調和のとれた実効性のある植物品種保護制度を整備していくことが必要である。そこで、アジア各国が植物品種保護制度の整備や国際的な調和の重要性について共通認識を持ち、植物品種保護に関する協力を進めていくため、平成19年11月にタイ・バンコクで開催されたASEAN+3農林大臣会合（AMAF+3）において、日本のイニシアティブの下、各国に対して「東アジア植物品種保護フォーラム」の設置を提唱し、すべての参加国からの支持を得た。このことを受け、平成20年7月23日にフォーラム第1回会合を東京で開催することとなった。



フォーラム参加者およびゲスト

2．東アジア植物品種保護フォーラム

フォーラム第1回会合には、ASEAN+3各国（日本、中国、韓国、ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム）政府の植物品種保護担当局長など44名が参加した。またゲストとして、豪州、オランダ、EUの植物品種保護当局の代表者、米国の植物特許担当者と、植物新品種保護国際同盟（UPOV）、ASEAN事務局の各代表者も出席した。

今回の会合では、今後のフォーラムの活動指針を定めるとともに、東アジア各国の植物品種保護制度を強化し、その国際的協調を図るための意見交換が行われ、以下の協力活動の実施が提案された。

①植物品種保護制度の運営能力向上のための人材養成

・フォーラム参加各国から研修員を招いて、日本、中国および韓国が実施する国際研修プログラム

・ブルネイ、インドネシア、マレーシア、ミャンマー、フィ

リピン、シンガポール、タイ、ベトナム各国が実施する国内研修プログラムおよびセミナー・ワークショップ
・上記各国のプログラムへの日本、中国、韓国の専門家の派遣

②制度の発展・調和に向けた協力活動

審査基準と栽培試験実施方法などの調和およびデータベースの開発・利用、電子出願システムの開発・利用などに関するワークショップ等の開催

③各国間の審査協力に関する協力活動

④DNA品種識別技術の開発

⑤制度に関する情報交換の促進等のための
フォーラム公式ホームページの設置

これらの提案については、各国から積極的に参加したい等の意見が出され、合意が得られた。今後はUPOVおよび同盟国と協調しつつ、日本のリーダーシップによりこれらの活動を着実に実施し、東アジア地域における効果的、効率的な植物品種保護の実現に向けて支援してまいりたい。

3．今後の取組

3−1. 各国から研修員を招請して実施する研修プログラム

今回のフォーラムに基づく協力活動として、以下の人材養成研修を今年度中に実施予定である。

・栽培試験実施計画の作成方法
・栽培試験対象植物の管理・栽培方法
・審査基準に基づいた各形質の特性の評価方法
・特性データの収集・分析方法
・写真撮影方法
・栽培試験報告書の作成方法
・区別性、均一性及び安定性の審査方法

③長期専門技術研修（2009年1月末〜2月末）

本研修は、より実践的に栽培試験の実施について学ぶ、On the Job Trainingプログラムであり、フォーラム参加国の中から2名の植物品種保護担当者を招き、独立行政法人種苗管理センター本所（茨城県つくば市）で実施する。

また、品種保護対策に関する講義では、品種登録後のフォローアップやDNA品種識別技術の利用について学習し、簡単な技術実習を行う。

研修項目は以下の通りである。

・種苗管理センターの業務概要説明及びオリエンテーリング
・品種登録業務及び栽培試験の概要説明
・栽培試験業務の実習
・試験計画策定
・栽培試験実施（作業計画作成、管理作業、調査・特性評価、報告書作成）
・対照品種の管理
・栽培試験マニュアルの作成

3−2. 専門家の派遣

上記研修に加え、フォーラム参加各国が行う研修、ワークショップ、セミナーへ専門家を派遣し、同盟国の植物品種保護当局と協力して、各国の制度運営能力の強化を支援する。現在までに、5ヶ国から要請があり、専門家派遣を準備中である。また、必要な場合は、欧州植物品種庁（CPVO）等の専門家も招請する。

3-3. 審査基準及び審査・栽培試験方法の調和に関するワークショップ

フォーラム会合において我が国が提案した「審査基準及び審査・栽培試験方法の調和に関するワークショップ」を2008年11月にインドネシアで開催する。このワークショップでは、UPOVの定めるテストガイドラインに準拠した審査基準の作成方法および審査方法について理解を深める。フォーラム参加国からも各国における審査基準および審査・栽培試験の現状についての報告が行われ、各国の審査・栽培試験方法の調和について検討を行う。

このワークショップについては、今後とも継続的に実施していく予定である。こうした活動により、将来的には審査報告書の交換や、種類別の集中審査方式の採用による審査の効率化・迅速化が可能となり、育成者の負担削減に繋がるものと考えられ、我が国としては積極的に取組んでいくこととしている。

４．おわりに

東アジア諸国における品種保護制度の導入及び強化を支援する取組みは、我が国の育種家や種苗会社の活躍の場を広げ、新品種開発を一層推進するとともに生産者の保護にもつながる。また、一方で、東アジア諸国にとっても、優良な品種の導入や国内育種の振興につながるものであり、世界の食糧問題や環境問題の改善など様々な恩恵をもたらすものである。

しかし、こうした新品種育成の好循環をアジア地域レベルで実現するためには、植物品種保護に馴染みの薄い国々に対する意識啓発や専門的な人材の育成を通じて各国の制度強化に協力していくなどの、地道で継続的な努力が必要不可欠である。農林水産省では、本フォーラムの下での活動を通じ、東アジア地域におけるUPOV加盟国の増加、また品種保護制度のない国における制度の立上げなどの実現と、同時に、付加価値の高い日本の植物新品種の保護の強化を図っていく考えであり、そのことが日本農業の国際的な競争力の強化に繋がるものと期待している。

フォーラム本会合の会議風景

色彩豊かな葉色の変化に魅せられて　Ⅱ

～私の思い出の色葉植物～

―カラーリーフプランツ―

横　井　政　人

昨年号には私の約40年間の葉色変異種や品種の収集暦をまとめた。今回は収集中に見つけたり話題になった色葉植物（斑入り植物を含めたカラーリーフプランツ）について述べてみよう。

どの分野でも、コレクターは珍しいもの、見たこともないものに興奮し手に入れたくなると思う。私自身も、初めてみる種類や品種、江戸時代にあった植物の再出現、前々から希望していた種類・品種が思いがけずに目の前に現れると、エキサイトすることがしばしばあった。

ここでは、私を魅了して止まない色葉植物の種類や品種をできるだけ多く挙げてみよう。

取り上げた種類・品種は国内・国外の1）黄金葉、2）銅葉、3）銀葉、4）斑入り葉、5）その他、トリカラー（五色葉）で、この順にまとめてみる。

1）黄金葉

トチノキ黄金葉

Aesculus turbinata（トチノキ科）

栃木で入手。本個体は明るい黄色で初夏は最高。イギリスにもセイヨウトチノキの似たような黄金葉品を見たが、日本では日焼けに弱い。

ベゴニア・サザーランディア‘オーレア’

Begonia sutherl g andii‘Aurea’（シュウカイドウ科）

タンザニア原産という小型のかわいいベゴニア。花はオレンジ色で5～10月に開花。30cmまでになるベゴニア仲間でこんなにきれいな黄葉品種はないと思う。真夏も日陰に置けば日焼けはなく、涼しい葉色。広がるタイプ。タキイ種苗発売。

カシワバアジサイ‘リトル・ハニー’

Hydrangea quercifolia 'Little Honey’（アジサイ科）

大形のカシワのような葉型で、花穂が大きいので人気がある。最近英国のキャッツ氏発見の黄金葉は春から夏の黄色がすばらしい。やや小型。日本ではまだ普及していない。半日陰のほうが葉色はきれいなようだ。

ギボウシ‘サム・アンド・サブスタンス’

Hosta‘Sum and Substance’（ユリ科）

ギボウシのなかで最大黄金葉。葉は長さ90cm、幅40cmにもなる。花色はうすい白紫色。広いスペースが必要だが豪華。

ルス‘タイガース・アイ’

Rhus typhina‘Tiger’s Eye’（ウルシ科）

米国原産の大形落葉樹でウルシの仲間であるが本種はかぶれない。細く切れた葉の真夏の冴えた黄金葉は特に見事。数年前から外国では販売されている。自根で広がる。

2) 銅葉

ウリハダカエデ'黒古光紅'

Acer rufinerve 'Kuro kogo beni'（カエデ科)

矢野氏が奈良の道端で発見した。一見葉が真っ黒に見え驚く。こんな葉色はカエデでは見たことはない。時期によっては紅色のようである。販売はまだない。国分氏の分析によると黒い色素がなく紅色色素のシアニジンであった。葉の黒色はおそらく緑色の葉緑素が関与していると思う。

ネムノキ'サマー・チョコレード'

Albizia julibrissin 'Summer Chocolate'（マメ科）

18年前サカタのタネからいただいた。当時、会社は植木には興味がないのであげるといわれ、ネムノキにこんな葉色が出たのかと私自身は大喜びだった。現在では普及してカラーリーフ小鉢で売られるようになった。米国の特許をとるとき故岩佐吉純氏に許可をもらいに行ったことを思い出す。現在、もっと濃い葉色品種が出ているという。

ダリア黒葉'ビショップ・ランダフ'

Dahlia 'Bishop of Llandaff'（キク科）

1928年にウイズリーのコンクールに出品、以後現在でも生産・販売されている長寿品種。日本でも最近わずかに植えられている。5～6年前英国で入手した。 国分氏の分析によると上記のウリハダカエデの葉に含まれる色素と同じシアニジンで、黒色になるアントシアニンではなかった。

矮性セイヨウブナ

Fagus sylvatica 'Purpurea Nana'（ブナ科）

巨木になる種類であるが本品種は20年たっても人の背ぐらいで、地味ではあるが狭い庭にはよい。最後は3mにはなるという。日本ではまだ生産がない。

3) 銀葉

アルテミシア

Artemisia mauriensis（キク科）

常緑低木のヨモギ。日本には木になるヨモギはないのでおもしろい。ハワイのギンケンソウが生える地帯に見られる。細かい銀色の葉をつける上品なヨモギで私の好きな植物のひとつ。ハワイの武田氏から12～13年前に枝をいただき保存している。高地にあるので耐寒性があると思ったが、意外に霜に弱いので冬は加温が必要。夏は涼しげでよい。

4) 斑入り

ラセイタソウ

Boehmeria biloba（イラクサ科）

太平洋側海岸自生の葉の厚い宿根草。まれに庭植えする。斑入りはまだ珍しい。

カンスゲ類 カレックス‘スパークラー’

Carex ‘Sparkler’（スゲ科）

永井万作氏よりいただき、テンジクスゲの品種であると横井・広瀬が1998年に発表。インガー氏が品種名を‘スパークラー、花火’と命名した。今はかなり普及した。またカレックス‘シルヴァー・セプター’Carex‘Silver Sceptre’は私の庭の突然変異品とダーク氏が同定し（2007）、英国人が命名。まだ普及していない。白覆輪でグラウンド・カヴァーによい小形品種。

ハンカチノキ‘綾錦’

Davidia involucrate ‘Aya-nishiki’（ヌマミズキ科）

柴道明氏が中国より導入した株の中にいろいろのタイプの斑入り個体があり、特に印象的な刷毛込み品を選抜・育成した。覆輪、中斑、散り斑など多彩。

ウワバミソウ（ミズナ）白覆輪

Elatostema umbatum（イラクサ科）

日本、中国の山中湿地に自生する普通の宿根草。野性味があってよい。散り斑、黄金葉品もある。

ショウジョウソウ

Euphorbia cyathophora ‘Yokoi’s White’（トウダイグサ科）

ポインセチアのような赤色の苞がでる宿根草。メキシコには多く自生する。この白覆輪斑入りは私が沖縄で雑草として捨てられていたのを1989年に発見、あまりのすばらしさに驚嘆したものである。安藤正彦氏の著書「使ってみたいガーデンプランツ」（グリーン情報2006）に紹介された。しかし寒さに弱いので維持が難しく、最近は生産・販売がなくなった。八丈島にも黄覆輪品が出たが今はない。米国特許品。

ギボウシ‘クレープ・スゼッド’

Hosta ‘Crepe Suzette’（ユリ科）

ふつうギボウシは株元の芽が殖えて大きくなるが、この品種は根がヨモギ状に伸び、1株植えると1m幅にいつのまにか広がっている。変わった小型の品種で好ましい。

イヌツゲ‘スカイペンシル黄斑入り’

Ilex crenata ‘Skypencil Variegated’

私が安行売店で数年前に発見。刷毛込みや覆輪斑など出て不安定であるが、ほうき立ちの樹形がおもしろいので大株になれば印象的な木になると思う。

モミジ（バ）ヒルガオ

Ipomoea cairica（ヒルガオ科）

白黄覆輪品、本当に驚きの完全覆輪。熱帯の多年性雑草であるが覆輪葉は見事。アモイ島で桑島氏の発見。販売はない。なぜか挿木や接木しても活着しないのでまだ殖えない。暖地では越冬。かってヒルガオ科のルコウソウにも上品な覆輪葉品が発生したが惜しいことに一年草のため保存できなかった。

ジャカランダ‘エレガント・ショー’

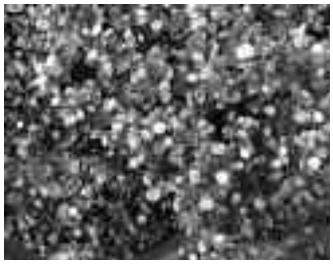
Jacaranda mimosifolia ‘Elegant Show’

（ノウゼンカズラ科）

花が青く上品な花木。ネムノキの葉のような長さ5㎜の細かい葉をよく見ると完全な覆輪で信じられないほどすばらしい。行徳氏発見。刷毛込み斑品種‘サマー・サンバ’もある。寒がるのが欠点。

ワイヤプランツ'スポットライト'

Muhlenbeckia axillaries f. variegate‘Spot Light’（タデ科）



10年ほど前、ロンドンから遠い園芸店でこの斑入りがハンギング・バスケットに使われているのを見て驚き、欲しかったが分けてもらえなかった。それが昨年から日本で買えるようになった。派手な斑入りではないがおもしろい。常緑小低木。

バジル'ディープアロマ'

Ocimum basilicum（シソ科）

代表的なハーブ、バジルに白覆輪葉品種が発現した。ハルディンの新発売。葉が美しく、香りが良く、食用にもなる斑入り品種はすばらしい。

ラヴェニア黄覆輪

Ravenia spectabilis（アカネ科)

キューバ原産の明るい濃ピンク色の花が親しみのある常緑低木で、熱帯の花にしては、くどくない花色。濃い黄覆輪葉も明るく強健、鉢植えに向くと思う。まだ販売がないよう。タイから持参。

ムクロジ刷毛込み斑

Sapindus mukurossi（ムクロジ科）

落葉・羽状複葉高木。DNA の研究からカエデと類縁であるということにより、今カエデ科をムクロジ科に代えるという話題をまいている。この植物にも刷毛込み斑入りが最近見つかった。

ダイキンギク

Senecio scandens（キク科）

日本暖地からアジア海岸に自生する宿根草。この華やかな斑入りは中国人より購入。一年中、印象的な白、クリーム、紫紅色の刷毛込み葉を出しながら伸び、ややつる性になる。花は濃い黄色で秋遅くから春早くまで咲き、花の少ないときによいものである。埼玉南部では無加温で越冬。

サルトリイバラ

Smilax（サルトリイバラ科）

中国産で大形。今までにない新芽が真っ白に出て、のちピンクがかる派手な品種。耐寒性。販売はまだない。

ハスノハカズラ

Stephania japonica（ツヅラフジ科）

海岸に生える常緑木本性つるもので一般には栽培しないが、このつる黄斑入りは上品でよい。

カミヤツデ

Tetrapanax papyrifer ‘Variegata’（ウコギ科）

台湾原産という大形の葉をもつ耐寒宿根草。オーストラリアのコレクター宅で発現した見事な覆輪葉。根茎で容易に殖えるのでこれを分けてもらったが、理屈どおり、残念なことに今だに覆輪葉は発生してこない。また大葉で有名なグンネラ(Gunnera)にも見事な完全覆輪葉がコスタリカの樹林下にあった。大株で掘り取り不可能なので見ただけであったが(写真失敗)、現在は国で保護されているとのこと。

ハマゴウ

Vitex rotundifolia（クマツヅラ科）

広く太平洋沿岸に生える落葉低木。柴道雅史氏発見。覆輪、刷毛込みなどの斑を出す灰色葉で、地味ではあるが味のある斑入り品。販売はない。耐寒性。

5)その他 トリカラー(五色葉)など

ベニバナトキワマンサク

Loropetalum chinense（マンサク科）

中国自生常緑樹。樹の里 鈴木氏は長年実生されていて実に不思議でおもしろい斑入り葉やカラーリーフ品種を多数得ている。現在は育成中のため販売は特にしていない。

金葉モクレン

Michelia foveolata（モクレン科）

中国雲南、湖南などに自生するオガタマノキの仲間。柴道昭氏導入。大きな葉の裏側が黄金色の光沢で見事。下から見ると明るくてよいものである。一年中目立つ。花は径約7cmで白色。高さは最高30m。

カエデ類

Acer（カエデ科、ムクロジ科）

矢野正善氏は奈良県宇陀市に将来世界最大のカエデ収集地を作りたいとの夢をもって、現在、収集･保存･維持･管理に日夜努力中の方。世界には1,200余種もあるという。樹木の葉色でこんなにカラフルな植物は、熱帯のクロトン以外、ないのではないか。特に初夏の葉色の変化は見事。秋の紅葉はいうまでもない。完成すれば最高のカラーリーフ園になろう。オランダではカエデ園をアセラタム Aceratum と称してボスコープの植木地帯にファン･フェルデレン親子が開園。規模は大きくはないが品種が多く、オランダ訪問の際には必ず寄った。矢野氏はさらに、すぐれた新品種を育成したい夢をもちカエデの交配、実生を重ねている。

まだまだ記したい魅力的な植物は尽きない。今後の新たな品種のますますの発現を期待して、紙数の関係で筆をおく。

南北アメリカの花き業界の消費拡大活動
【Flowers For Kids】

株式会社フラワーオークションジャパン　取締役　営業副本部長
佐　無　田　仁

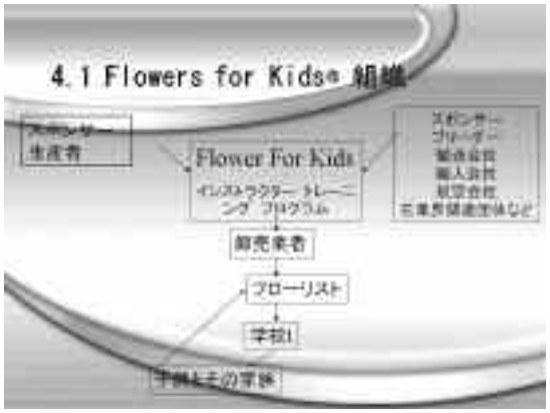
Flowers　For　Kids
一回の授業で、花の消費者を増やしましょう

エクアドルの生産者が始めたアメリカの消費拡大活動についてご紹介します。

日本全国で行われている“花き”を使った子供へのアプローチの方法と目的はさまざまです。食育が話題となり花育も話題になりつつあり、花育という言葉がでて、議論の場も増えています。情操教育としての花育、社会貢献としての花育、ビジネスとしての花育など、とらえ方や実行のされ方にもかなりの幅があり、それぞれが生まれ育とうとしています。もちろんどれも否定されるべきではなく、育っていってほしいのです。

今回紹介する【Flowers For Kids】は、花の消費を拡大したいという願いの下、子供たちに花を知ってもらい楽しんでもらう、しかも家族を巻き込みながら非常に身近な小回転から始まるという消費拡大を目指したものです。もちろん長い目で見ても効果はあるでしょう。

大人が子供にアプローチするわけだから、日本では花育ですねと言われるでしょう。ではなぜ、私があえて消費拡大活動と呼ぶか、ここがポイントなのです。【Flowers For Kids】の創始者ラミロ・ペニャヘレラ氏は、はっきりこう言っています。“【Flowers For Kids】は、ボランティアではありません。あくまでもビジネスの一貫です”と。



組織図

ラミロ氏はフラワービジネスについてこうも言っています。「花屋などのフローリストの現状は、どちらかと言えばアーティスト色が強く、あまりマーケター（販売人）という感じではありません」。「フローリストはお店の裏でユニークな花のアレンジをすることに幸せを感じ、お店の前に出て花を販売しようとすることはあまりしません」。「ここで大事なことは、商品を好きでしていることなのか？　それとも、その市場（マーケット）を好きでしているのか？　どちらなのでしょうか？」「生産者は心配しています。そして、花屋さんがプロフェッショナルとして花を販売することができるように助けたい」と。

私がはじめて【Flowers For Kids】に出逢ったのは、6年前のオランダ　ホルティフェアでした。今思えばラミロ氏が小さなブースで説明してくれたのを思い出します。そして今年、連絡を取りはじめ、8月に日本ELFシステム協会＜JELFA＞主催のセミナーで、講演をしていただきました。花育の話題で盛り上がりを見せる中、非常に興味深い取り組みとして紹介します。

(1) ラミロ・ペニャヘレナ氏と運営資金

＜経歴＞

エクアドルで10エーカのかすみ草でビジネスを始め、フローテックという卸売り会社の社長を務める。5年前Flower For Kids（FFK）設立の為会社を辞め、現在FFKのディレクターである。FFKスタッフは現在4人でエクアドルの首都 キト（Quito）に事務所がある。

＜Flower For Kidsの運営資金＞

Flower For Kids は寄付金で設立、運営されており、このプログラムの考え方に共感しているスポンサーによって100%サポートされている。

Kidsクラス（JELFA視察より）

(2) 設立の経緯

「2003年3月、イギリスのヨークというところに住む友人を訪ねました。ロンドンから北へ2時間ほど行ったところです。私は、美しい14本ほどの花を束ねた約18ドルのブーケをお土産として渡しました。彼女はすぐさまブーケを受け取ると、スリーブをはずし、花瓶を準備しました。食器棚から、フラワーフードの袋を取り出し、専用のはさみで、流水につけながら、生ける為に花をカットしました」。

これはアメリカではあまり見かけることができない。アメリカでも消費者に知識があればと思い、マーケティングを強化することで花の消費が増えると考えた。その思いは一年続き、翌年の夏ラミロ氏は子供を通じてアメリカの家庭に花を紹介していくのが一番いい方法だと確信した。

(3) 確信した理由

①子供の頃に花に出会い知識さえ身につければ生涯花を愛し購入するお客様になる。
②マーケティング活動は商品それ自体よりも重要であるのに、花に対してのマーケティングがほとんど行われていない。
③子供の頃から商品に関心を持たせる戦略である、マクドナルドやリーバイス、ナイキなどの戦略は、私たちがよく知っている子供たちを消費者にしており、すでに実証済みであるから成功すると確信する。

(4) 活動と実績

2003年　Flower For Kids 設立
2004年　ラミロ自身で子供にレッスンを行う
場所：ワシントンにある小学校
対象：4年生から6年生
期間：8週間

この8週間で体験した子供達の反応からこの戦略に確信をもつ。しかし自分一人が講師をしていては、長い年月がかかることを痛感する。子供達への直接教育をやめ、卸売り業者や小売店が子供達にレッスンできるように小売店向け講師養成プログラムを新たに考え始める。

2005年　資金集めと協力者を求めエクアドルとアメリカの生産者、輸入業者、卸売者を訪問する

2006年　小売店と卸売業者向けに講師養成プログラムを実施
場所：コロンビア、エクアドル、カリフォルニア　合計11社
対象：卸売業者、スーパーマーケット
受講人数：フローリスト322人

2007年　小売店向け講師養成プログラムを実施
場所：コロンビア、エクアドル、カリフォルニア　22箇所の地域
対象：小売店
受講人数：フローリスト600人以上

さまざまなグッズ

⑸ フローリスト（小売店）向け講師養成プログラムの仕組み

①卸売り業者がフローリスト向けに『Flower For Kids 講師トレーニング』の講習会を主催し、フローリストが申し込みをして参加する。
受講費用：1店舗から1人目$100、2人目$25
講習人数：50人
講習時間：2時間
講習終了後参加者全員にFFK講師証明書が発行される。
講習会で供給される教材
$100参加者：FFKの旗、花のネームタグ、FFKステッカー、教育マニュアルフォルダー
$ 25参加者：教育マニュアルフォルダー

②講習後フローリストは各自で地元の学校にコンタクトをとり授業を行う。一度の講習でフローリストは自信を持って学校へ行き子供達にレッスンができるようなる。初めて学校で授業を行う時は卸売業者のスタッフもお手伝いをする。

⑹ フローリストが行う学校での授業内容

卸売業者からの提供品（無料）
花（1人30ドル相当）・フラワーフード・スリーブ
年齢対象：4年生から6年生
授業時間：合計24分
授業内容：3部（各8分／合計24分授業）
子供達が受け取るもの：自分で作った花束、スリーブ、フラワーフード、花の取扱説明書、FFK名前ワッペン、花屋への招待状
第1部　お花がどこで、どのように育つのか？（TPOによるお花の使い方）
第2部　お花の扱い方・・・ お花が喜ぶことと嫌がること、フラワーフードの作り方
第3部　ブーケの作り方・・・フィラー、ライン、メイン、グリーンの違いについて
そして最後に子供達は自分のブーケを作る。

花のセッティング

⑺ 花の消費につながる大切な招待状とまとめ

招待状

今まで述べてきた過程で、フローリストは学校へ行き講師プログラムで習った方法で、子供たちに授業を行う。授業の最後にフローリストは子供達に自分の花屋へ来るよう”招待状”を渡す。ここで一番大切なのはこの招待状で、”大人と一緒に”、この招待状を持って花屋に行けばFFKクイズとFFK卒業証明書と2本のメインの花（Focal Flowers）がもらえるという戦略的な招待状である。つまり、子供の強い興味と花の知識に魅了された両親が子供と共に花屋を訪れ、フローリストは両親にも花やその扱い方を教える機会に恵まれる。またブーケ、アレンジメントを販売する機会が与えられ、一度お店を訪れた子供や両親はその後定期的なお客様になり長期的で広範囲に及ぶ花のコミュニティーを築き上げることができる。

⑻ 学校授業を行っているフローリストの感想

私のお店はアメリカのミッソーリにあるトロイフラワーショップです。2007年3月にこのFFK講師プログラムに参加しました。現在までに学校で19回の授業を行っており、教えた子供の人数は600人以上に上ります。私はこの学校での教育プログラムに夢中になっています。子供達が花の美しさをすばやく理解する様子を見ることが私にとって素晴らしい体験です。子供達は授業中とても集中しており、たくさんの質問を投げかけてきます。また子供にとって美しいものに対する感謝の気持ちや扱い方を覚えることはとても大切なことだと思います。

⑼ 協賛と寄付金額

Flower For Kids は寄付金で設立、運営されており、このプログラムの考え方に共感しているスポンサーによっ

Kidsクラス

て100%サポートされている(55組の農家を含むアメリカとエクアドル生産者と44社の企業)。
生産者:南アメリカ・北アメリカ(エクアドル・コロンビア・カリフォルニア)
生産者は1ヘクタールあたり年間250ドルの寄付をしている。これは1ヘクタールあたり4箱の花箱に等しい金額である(運営資金の約80%をサポートしている)。
他企業:ブリーダー・運輸企業・輸入企業・飛行機会社・納入業者・フラワー協会で、フラワーフード、スリーブ、講習会場などを提供している。

(10) スーパーマーケットへのトレーニング

スーパーマーケットへトレーニングすることにより、スーパーマーケットの販売員がよりお客さんに対し、顔の見える状態となる。教材の60項目の内容を実施することにより、子供やその親をお客として得ることができ、社員教育をすることができる。

(ポイント整理)

① 南米の花き生産を支える北米の消費拡大が目的であること
② 日本で多くおこなわれているアレンジ教室ではなく、花の成り立ちや扱い方の説明が中心であること
③ インストラクターは、生花店のスタッフがおこない親しくなることが重要である
④ インストラクターは、俳優として子供たちを楽しませ興味を持たせること
⑤ 南米の生産者や関係者がスポンサーとなって支え、流通業者がバックアップしていること
⑥ 活動組織の本部が存在し、画一的なコントロールがあること
⑦ 内容は決して深いものではないが、継続性が可能な仕組みであることなどです。
⑧ このプログラムで成功すべきことは、花屋の売上が上がるということ
⑨ 花産業が良くなるために、個人や家庭での消費が増えることが重要だということです。

(まとめ)

日本でこの活動を推進するとしたら、学校よりもスーパーマーケットが先になるかもしれません。あらゆる面で日本版にリメイクしなおし、試してみる価値はあるでしょう。しかし、一方でスポンサーの問題があります。一般企業に支援を求めることも必要かもしれません。花業界の一員として、考えさせられる事例であることは間違いないでしょう。

ラミロ氏の言葉を借りて、みなさんに問いかけさせてください。
「花が好きでここにいるのですか？　花産業が好きでここにいるのですか？」

もちろん、笑顔がどこにでもあることを忘れてはいけないでしょう。

スーパーでのKidsクラス

◆ レポート

世界の花贈り事情と日本

花キューピット協同組合　国際室室長
中　尾　成　昭

花キューピットの海外取引ネットワークの拡張と取引に関するクレーム分析などのいわゆる取引クオリティのチェックを兼ねて、昨年来、約1年間で10回ほど海外を訪ねました。

タイの花店事情

まずはじめに、タイに出向いたのですが、一番ギャップと大変さを感じたのはお花の流通の違いでした。これはだいたいアジア諸国の場合は同じ状況なのですが、お花の仕入れは24時間オープンのいわゆるストリートマーケットです。つまり、お花屋さんでなくとも誰でもお花屋さんと同じ金額でいつでもお花が購入できるということです。バンコク内でお花を飾ってある場所はたくさんあっても、いわゆる欧米や日本のフラワーショップ型の高付加価値販売のできる小洒落た花屋さんの店舗というのはほとんど見当たりません。

バンコクの夜中のフラワーマーケット

しかしながら、そんな状況下でも数は多くありませんが、やはりフラワーデザインの腕を磨き、質の高い教育を受けた方で誠意を持った顧客対応を行い、ちゃんとマーケティングに基づいた商品販売展開を行って成功しているお店もあります。

このような状況下ということで、欧米や日本のように花店を中心としたいわゆるリテールショップの組合とか共同事業体というのは、アジアにはほとんど存在しません。したがって私たちがアジアの国との通信配達取引のネットワークを利用する際のポイントは、そのエリアを束ねられる、そこの最高の店舗をパートナーとして設定できるかどうかにかかっているとも言えるでしょう。

中国の事情

タイでの仕事の後は、しばらく中国との折衝が続き、毎回大変なストレスがたまったのは事実です。お花のビジネスに限ることではないと思うのですが、北京オリンピック一年前という時期もあったのか、中国の民間人の中には様々な分野で成長を遂げる経済活動にぜひともあやかりたいと思う輩が数えきれないくらいおり、我々も相手の見えない中国という遠隔地とのお花の商品のやりとりの中で暗躍するその手の中国人ビジネスマンもどきに振り回されたこともありました。

ただ幾度かの折衝を経て本当に誠意ある花店さんたちとも接触がやっとできるようになり、粘り強い調査と聞き込みの甲斐もあり、その中国国内花店の方々の信頼を束ねるキーパーソンとも出会うことができました。今では北京を拠点にしてかなり深い信頼関係をベースに、花束やアレンジメントといったお花の商品の遠隔地取引による中国国内でのお届けもクレームをほとんど出すことなく取引できるようになりました。

中国花卉協会小売部門との打合せ

そして、昨年11月には山東省の済南市で中国国内全土からの花店オーナーの皆さん約200名が集まられた花店の全国大会に招待いただき、日本のフラワービジネスの歴史と現在に関する講演とフラワーデザインのデモンストレーションを開催させていただきました。

率直に感じたのは、フラワービジネス自体はこれからどんどん膨らんでいくという予感はするのですが、お花を扱うという「心」と「技」の部分がすでになおざりにされているような気がしてなりませんでした。

オーストラリアにて

10月にはオーストラリアのアリススプリングスという、ほぼオーストラリア大陸のへそにあたるようなど真ん中で、あのエアーズロックのそばのリゾート地でのオーストラリア国内全土の花店さんたちが集まる全国大会に参加させていただきました。

エアーズロックにて

この国では人口は約2千万人と、日本の6分の1ほどの規模ながらまさに今、日の出の勢いでオーストラリアのフラワービジネスが伸びてきているという印象を受けました。国土の大半が砂漠地帯という特殊な環境を持ちながらも、お花のビジネスに関してはある意味、イギリスにルーツを持つオーストラリア人たちは、アメリカ型ビジネスモデルと日本の「誠実さ」を大切にする商売とのハイブリッドマインドのような経営が功を奏している印象をうけました。

ここではアメリカのフランチャイズチェーンやボランタリーチェーンにも見られる、いわゆる経営相談役「フィールドサービス」システムを業界として導入しており、これを彼らは経費としてではなく、投資と位置づけて花店に対

大会主催者のみなさんと

してビジネスの基礎からしっかりと学ばせる機会を常時作っているということです。たしかに訪ねる花店それぞれが店舗もきれいで、各店特徴もあり、フローリストたちの個性や実力もなかなかのものだと感じました。

ただやはりフラワーデザインの奥行きや実力という観点で日本と比べるともうひとつ遅れている印象は否めませんでした。しかしながら、オーストラリアの場合はその地域植生植物である「ワイルドフラワー」を自国内のさまざまな場所での装飾、そして花店小売りの現場でも本当によく使っているのが印象的でした。国内での主要生産花を自分たちでも利用し、また競争力のある花として海外にも売り続けているという意味では、お花の生産先進国としてすごい国と言えるでしょう。

スイスの花事情

そして12月のクリスマスシーズンにはヨーロッパのお花の遠隔地取引の本部があるスイスはチューリッヒを訪れました。スイスに限らずヨーロッパの国々ではキリスト教と相まってクリスマスをはじめとしさまざまな季節イベントがもの日となり、お花の安定的な消費を支えているというふうに感じます。

そしてなんといっても、お花の流通システムの完成度の高さです。スイス国内に唯一ある花市場は4～5千坪ほどの広さもさることながら、その品揃えは度肝を抜かれました。私たちは平日の午後2時頃に訪れたので、仕入れをする花店の方々こそそれほど多くはなかったものの、切り花の種類、質、量そして鉢物の種類、質、量とも本当にいい分のない品ぞろえの上に、花器やその他の資材などの分野のものも、とにかく豊富で花店を経営するためにはどんなものでも揃う市場でした。こ

の市場は7つの仲卸から成り立っており、事前に登録してあるカード持参の花店関係者しか入れないし購入ももちろん出来ません。

当然このように流通がしっかりしていると花店も高付加価値の商売になるので、チューリッヒ中心部の花店も素晴らしいショップばかりでした。その技術のレベルもまさにデザイン先進地「ヨーロッパ」という雰囲気で、単独店舗にしてもデパートなどのインショップにしても、一つひとつのお店が素晴らしいのです。もちろん路面店舗形態のお店も1～2店見かけましたが、クリスマスシーズンということもあり、デザインをされたお花の商品がとにかくよく売れていました。そして市場流通と異なり、安定価格で安定供給がこれだけあるということは、花店や業界で大きな企画ものでの「花の商品」の一定量の手配やタイミングも図れるので、おのずと業界自体の規模も計画的に大きくできるということです。

やはりヨーロッパはいろいろな意味でお花の先進国と言えるでしょう。

スイスの花市場。広大な面積と豊富な品揃えを誇る

アメリカ合衆国の花店事情

今年4月にはアメリカ合衆国はオクラホマシティに行きました。このオクラホマシティ自体は合衆国の中でもどちらかというとそれほど集積の高い都市ではないので、ここをもってアメリカのアベレージということはできないと思いますが、少しヨーロッパや日本との花贈りの感覚は違うかもしれません。

アメリカの花店はやはり、お花の商品の表現方法がデザインなどの技術力でというよりは、むしろバルーン（風船）などのアクセサリーや小物での演出による付加価値が多いような気がします。ヨーロッパもオーナメントなどをよく利用しますが、アメリカのバルーンなどの場合、ヨーロッパのオーナメントのような必然性はあまり感じられません。これは一つには国土の広さにより、デリバリーをはじめロジスティックスに生ものであるお花のデザインされた商品を乗せにくいという背景があるかもしれません。

ただ都市部の花店は、やはりどちらかというと今でいう「スタイリッシュ風」のヨーロッパ風モダンデザイン

アメリカの花店

のお店が多いということです。やはりお花のデザインに関しても、その情報は世界中がいまやITを介して同時に情報を共有するので、都市部の若い客層などはやはり「トレンドに敏感」なのは世界中どこの国も同じだといえます。

花は心を伝える

こうして各国の花店を通しての花贈り事情を比較すると、お花を贈る機会を作ったり、高付加価値のお花の商品を売ろうとする試みは各国それぞれビジネスとしての背景や事情があります。しかしどこの国でも共通して言えるのは、お花を贈ろう、あるいはお花をもらってうれしいと人間が思うのは、お花の商品をもらったこと自体よりもそこに一緒に贈られる「心」が伝わっているからなのだと確信しました。「心」を伝える媒体としてのお花の役割は今まで数千年の間そうだったようにこれからもずっと未来永劫続くでしょう。

とりわけ日本はアジアの中での花ビジネスの先進国として、中国のみならずアジア近隣諸国のリーダーとして、まずエリア内の生産と流通の指導者としての役割も果たさなければならないと思います。そして「心」を伝えるお花のビジネスを通じて自己実現できることをアジアの各国に伝えながら、欧米とも物・心ともに連携をとりつつ、私たちはもっともっと多くの世界中の人々の心を伝えるメッセンジャーとして自国独自の花文化を育てていきたいと思います。

過渡期の花卉試験研究の一員として

村　井　千　里

「地方試験場の業務は、生産者の見本となる栽培を実証すること」といわれ、成績書の標準区の値は、A級品の値を示さねばといわれた。

私は昭和32年に卒業し、日本園芸生産研究所花卉部助手という身分で花卉研究室に2年半お世話になった後、先輩の紹介で埼玉県農業試験場越谷支場の花卉担当として埼玉県職員となった。

越谷支場は、久伊豆神社と県立久喜高校の間にあり、その前には有滝大先輩が設立した、自称世界一小さい植物園があり､大先輩は久喜高校の生物を担当しておられた。

越谷支場は、その昔、大正10年に越谷園芸部として、農産加工と温室係の一部としてツツジの品種育成のほか、花木、宿根草、球根類の栽培にと、15坪ほどの温室で切花、鉢物の栽培も行っていた。だが、昭和に入ると農産加工を廃止し、花卉及び温室係がおかれ、圃場33ａが加わる。1a当たりの花木、切花類、宿根草、球根、一～二年草46種の切花特性と経済性の検討をするほか、水生花卉のスイレン、ハナショウブなど4種の圃場があった。

園芸部主幹は関慎之介で､『花卉栽培精説』を昭和８年に執筆刊行し、後に、赤城山麗の花木生産を振興した人である。私が赴任した後も、赤山方面に来たついでにと支場の方に来られ、いろいろとご指導をいただいた。

私の仕事は花卉生産全般で、特に鉢物はシクラメン、プリムラ類、ラン類、吉川のハナショウブのための井戸水流水法による促成栽培がある。その後、割竹を使っての大型ビニルハウスの花卉への利用、波板によるバラの切花ハウス栽培、屋根型のビニル連棟によるキクの切花等が課せられた。施設50坪ごとに、5万円位の収入予算が増え､見本栽培をしては三輪まで自転車で4号国道を走って、下谷生花、三輪生花（午後市）に出荷して収入達成のノルマに挑戦する日々が続いた。

昭和34～36年頃の農家は低設のフレームでガラス障子の屋根兼換気窓で、試験場は少し先進的であった。しかし、調査用の備品は500ｇ、1㎏、10㎏の秤と1mの竹製の物差しに、温度計類のみであった。

唯一、原材料費は比較的容易に予算化できて､セメント、砂利、砂、木材、ブロック、アングルなどの購入ができ、施設の仮設は労力を厭わなければ作ることができた。

創作して調査器具を作るのも、当時は一般的で、ピンチコック、ゴム管などは垣根をくぐって高校の理科室から頂いてきたものだ。

越谷支場から2～3㎞の農家にはキクとチューリップの生産農家が多く、深谷地方には球根低温処理場を持つ生産グループが5つもあったので、園研時代の経験を生かしたチューリップの促成栽培試験は次年度からのテーマに組み入れることができた。

特にジベレリン利用については、横井さんが成功した葉筒間滴下法があり、穂坂先生らは葉の先端より下がって開花してしまう欠点から、何品種かで効果を認めながら実用化の技術には不向きと考えていた。

フレーム栽培のチューリップでは、自然低温を感応させての半促成が多く、特に越谷地方では2～3月出しの問題として、フレーム掛けの時期による低温不足例が多く、支場での栽培や現地での試行で効果が認められ、関心が深かった。

昭和35年頃の主役、切花栽培用の組立てフレーム

昭和40年頃作られた深谷地方の切花用ビニールフレーム

液体ジベレリンによる卓効

セルリーの伸長用にと、試作の液体ジベレリンが私の手元にも届き試したところ、顆粒剤や錠剤に比べて効果が著しかったため、本格的に試験を再開することになった。

液体ジベレリンには活面活性剤のエアロールopとメチルアルコールの含量から、葉腋部に気泡を作らずに最も吸収しやすい葉腋が触れることが原因であろうと、液剤化の推進を行った。しかしその結果は、微量に含まれていたであろう、GA_4、GA_7の影響もあったのかとも考えている。

何故ならば、GA_3を基剤とした液剤は、多少反応を異にし、後に行ったGA_4+GA_7での試験と似たものであったからだ。

ジベレリン研究会の花卉部会での結果は、埼玉では効果があるのに国の試験場や大学の試験では効果がなく、昭和39年には継続テーマから除外されてしまった。

偶然による復活

残念な思いで場に戻ると深谷普及所と深谷市藤沢農協から「至急現地に」と電話。現地に行くと低温処理の事故で草丈が伸びない、低温量の不足であった。

私が現場でジベレリン処理をしたものは、5日ほどで急速に伸びだし、立派に開花、講習会場となった武井正司さんのハウスのものも処理をされて、やはり立派な切花が切れた。藤沢農協はジベレリン（液体）を取り扱うようになり、協和発酵工業の要請で、研究会とは別枠で、阿部室長を中心とした検討班ができあがった。メンバーには福岡園試の松川さん、高知農試の野並さん、鳥取農試の近藤さん、兵庫農試の藤岡さん、茨城園試の稲葉さん、千葉農試安房の林さんと私である。福岡の試験成果が農業新聞で紹介され、効果が全国的に認知されて面目を保つことができた。

チャンスは続くもの

上尾市の農試の敷地が埼玉国体のメイン会場予定地から、決定地となり、主力は熊谷の玉井分場へ移り、園芸部と越谷支場を合わせて久喜市に園芸試験場が作られた。

15haの敷地は1haごとに区切られ、ガラス室600坪、花卉係に300坪、それに100坪の観賞温室、ビニルハウス600坪、花卉係に100坪と、想像もできない環境が生まれ、低温処理は一般委託用（生産者からの受託）3室のほか、実験用5室の処理棟が作られ、温度段階の変化ができるようになった。

昭和42～43年には、球根卸・小売の一大種苗会社の第一園芸が、各種球根のデータ収集を条件に供試用球根のサンプル提供を主要試験場に呼びかけ、当場は品種ごとに150～200球のチューリップをいただいた。

チューリップ球根の品種別低温要求

大学等で、ジベレリン効果が認められなかったのは、品種によって低温要求が異なるためと考えたからだ。8℃、5℃、2℃の本冷温度に、5週間、7週間、9週間の本冷期間を組み合わせて、開花期、草姿（切花品質）を見ることにした。その結果、46品種を基にして花期の早晩（到花日数ではない）は7週処理が早く、温度の差に大差がなく、期間にもあまり差の認められないA型、2℃7週間が早いものC型、5℃7週間で早いもので8℃は著しく遅れるものE型など6型。

草丈は定植から開花までの日数で決定され、期間が長くなるほど草丈の高くなるⅠ型、低温で処理期間の長くなるほど草丈の高くなるⅢ型、8℃では本冷期間が長くなるほど草丈は高くなり、2℃、5℃では7週以上でも大差なく、低温量の積算で決定されるようなⅤ型があり、それぞれの中間をⅡ、Ⅳとして、低温処理の影響を表示できるようにした。

この結果から、A－Ⅲ型のモストマイルス、C－Ⅳ型のパールリヒター、E－Ⅴ型のマルタを用いて、低温処理の違いとジベレリン効果を調査し、低温要求度の低いモストマイルスやパールリヒターではジベレリン効果が少ないことを明らかにして、国や大学との効果差を証明しておいた。

モストマイルスのような品種では、低温が低く期間が長くなると、節間は著しく長くなり、花被幅も葉幅も著しく細くなるが、高温気味の短期処理で立派な草姿となり、古い品種のヒューブリリアントも、おそらく、このグループの品種であったと考えられた。

これらの試験が実施できるようになったもう一つのチャンスは、低温処理庫の冷媒がアンモニアガスからフロンガスに変り、乾いた低温風で庫内温度を降下させるようになったことでもあった。

低温要求の範囲からみて、品種多様化の時代は5℃の本冷が実用的であり、より低温要求の多いものはジベレリンで補完することが、農家の技術として得策と考え、この普及を図った。

低温処理の差によるチューリップ品種の開花生育型。上はピンクダイヤモンド、開花は5℃7～9週早い。下はマルタ、開花は2℃7～9週が早い。左列5週処理、中列7週処理、右列9週処理。上段8℃、中段5℃、下段2℃の本冷処理（予冷15℃3週間）

産地の組合の協力体制の確立

深谷地方の組合は､武井専次さんが足立の手法を学び、種の低温処理庫を利用しての球根冷蔵から、低温処理施設を核とした花卉組合があり、技術の非公開もあって、なんとなく対立していたが、深谷市藤沢農協が組合立の低温処理庫を作り、産地拡大を図った。

5処理場を核とする組合は、年によって品質を異にして安定した生産ではなく、問題が多かった。その時、新潟県から服部嘉夫普及員が促成産地を調査する目的で、園試に研修普及員として来県した。

そこで新潟県で選んだ同一箱の球根を6等分し、園試を含めた6処理場で低温処理を行った。

かなりの抵抗があり、温度条件などは一切調査しない、展示圃は各組合の代表的生産者の管理とするために5年継続する。調査は深谷普及所が担当するということでスタートした。温度処理の手ぐせを知る代表農家の管理はさすがで、それぞれ担当農家の関係する処理場が上位を占めたが、年により順位を大きく変える中で、園試は毎年2位以上であった。

そのため、乾冷5℃処理は深谷地方でも容認され、球質から遅れたものへのジベレリン補正という技術導入も、一般的にすべてに使われる技術となり､しょう油さしを用いる農家処理技術が開発された。

乾冷の普及には、湿冷に用いるおが屑の入手にも関係し、製材所の製材木の変化と丸鋸から帯鋸への改善は球根のパッキング材として細かくなりすぎて過湿害を受けることが多くなったことと、絶対量の確保の困難さも影響した。

発根球根の植付の省力化もあり、乾冷未発根球の植付は生産量拡大にも大きく貢献したしフザリウム病対策のベンレートの球根粉衣を容易にした。また大型パイプハウスの出現で栽培形態が変ったこともあり、切花チューリップの全国の50％以上を占める産地へと進んだ。

藤沢農協は低温処理施設をさらに拡大し、球根の共同購入から、フザリウム対策として新潟からの夜間トラック便の導入を進めたし､(当時貨車では3日ほどかかり、輸送中の2次感染が問題であった)、さらに切花の共選共同出荷で全国市場に販売して、昭和49年度には、産地協同体の育成で朝日農業賞の中央表彰の栄に輝いた。

ブラインド防止技術の確立

レッドマタドールは球根肥大がよく、球根生産が容易なことから注目される品種であったが、促成栽培では完全にブラインドするために、促成切花や鉢物に不向きであった。だが、ジベレリン処理で開花させることができた。

しかしその結果は、球根の条件によって異なり、効果の安定を見なかった。ジベレリンによる球根内成分の転流方向の決定が防止につながっていたが、ベンジルアデニン（サイトカイニン）の処理部位への物質の集積作用に注目して、ジベレリンとベンジルアデニンの混合処理により安定化し、実用になった。

GA3200ppm　BA25ppm混合処理によるブラインド防止。左無処理、　右処理、品種レッドマタドール

特にタンパメーターは、草姿も花形もよく優れていたが促成でブラインドしたため、この混合処理で良品を出荷することができた。また、葉筒中の蕾の基部に処理液がつくことから、その部分の細胞が大

きくなり、レッドマタドールのような花の花型はコップタイプとなり、その結果、18℃で開花せず、22℃くらいで開花するダウイン型の開花となり、切花の花の反転するような開花を抑え、開花温度も高めになった。

ジベレリンとベンジルアデニン、またはフルメットの混合液による品質改善

ジベレリンとサイトカイニンの混合処理は球根の養分の転流方向のみでなく、根からの養分吸収も活発化すると思われ、花や茎葉を大きくするほか、子球もかなり成長する。茎の細胞を比較すると、細胞の大きさが縦軸方向と横軸方向ともに大きくなっている。この混合処理は、嘉部らの球根密閉処理による、切花の開花促進においての品質劣化の回復に用いられてもいる。

チューリップの化学調節については、まだまだ種々の試験があるが、省略させていただくことにする。

チューリップサビダニの発見

チューリップの額縁病と産地で呼んでいた、ウィルス症状に似た病害は、当初、微量要素などの影響と考えられ、チューリップの促成栽培の安定化試験の一部に加えられ、京都農試との共同研究で国の助成試験で行われた。何故ならば、砂丘の造成後、多発しだしたという条件が優先して考えられたためであった。だが年末休みに入り、一人調査に当たっていたところ、花の先端に糸を張ったダニの大群を発見。早速京都に連絡し、深谷の現地に同様の状況がないかの確認を依頼した。

正月の仕事始めに、病虫部に防除法をと依頼したところ、フシダニの1種と分かり、大騒ぎとなった。

勉強不足は困ったもので、昭和43年、ハンブルグでのIGAで購入してあった、独乙の病害の本に、数年前からオランダで認められていて、時々独乙でも見られると記されていたのを発見したのは、大騒ぎし、同定に病虫部が走り回って確定した後であった。

左3球、チューリップサビダニ被害球。　右2球、正常球

温度が高いと繁殖が早く、ハウスの周辺に配管がある深谷地方では周辺から異常になるのは当然であった。

微量要素被害が思わぬ方向で解決してしまったが、その春、新潟、京都の産地での状況調査では、温度が低いため多発する状況ではないが散見され、収穫後の対策が重視された。

その後のこと

チューリップの共同研究最後の年を迎える4月、花卉専攻として農林部経営普及課に専技として転出。普及所の統合のため普及員辞令により早く普及所長になったりと、最後の11年は急激な生活環境にとまどい、花植木センター、園芸試験場と、2ヶ所の研究所長を1年ずつと、駆け足で過ごした。

この間、前専技の井上英雄さんの仕掛けた『都市近郊の鉢物・花壇苗』を普及花植木研究会のメンバーの執筆でまとめ、全国に配本したし、『埼玉県花卉栽培指針』前・後篇を県内の栽培事例をもとに普及、研究が揃って作成した。これには経済連の園芸部長の松戸の同級生である諏訪敏さんの協力があって、経済連の資金によるものであった。当時はコピー機が発達せず、青焼きの複写に便利なようにと、半透明の薄紙にして、産地指導の原本となるような資料にしたのも懐かしい。

ガルテンベルトの資料にならい、カード式の鉢物栽培書を企画し、誠文堂新光社の嶋田清三郎編集長とともに作成していった。その後コンピューター時代になり、読み下して調べるのでなく、一見して必要なデータを読み取る本ということで、設問項目に答えてもらう原稿依頼で、技術を整理したものを計画した。それが『切花栽培マニュアル』『鉢物栽培マニュアル』である。執筆者の人選は工藤忠さん、伊丹清さん、小泉力さん、長岡さんに加わっていただき、完成させた。

埼玉県退職後は、協和発酵工業のつくば研で9年、併せてテクノホルティ園芸専門学校に5年在籍。その後講師として時々授業を受け持ってきたが、今年から農場再整備のため、後輩の村川文彦さんとともに半ば常勤のようにして、夏休みなども指導にあたっている。

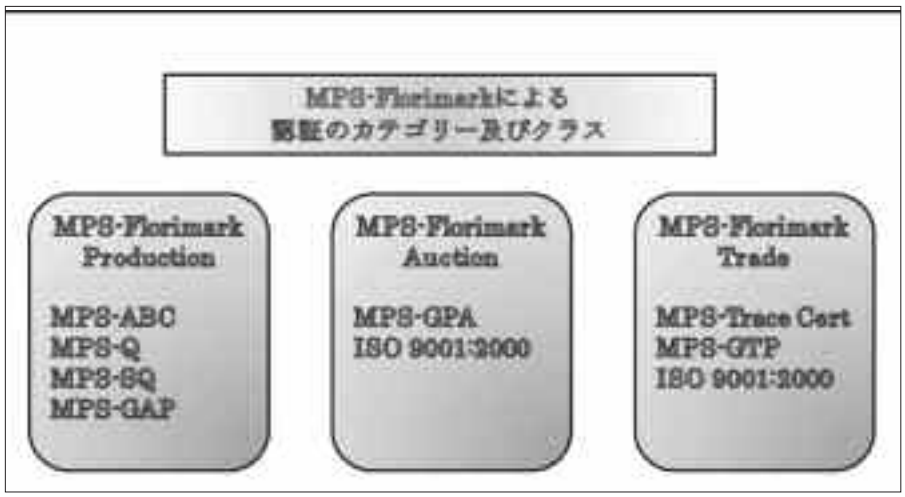
「MPS GPA」を取得して

フラワーオークションジャパン　取締役　物流本部副本部長
長　岡　求

◆MPS-GPA取得

弊社は平成20年の春にGPA(Good Practice for Auction)というMPSの認証を取得しました。そして、以下のロゴの使用権を取得することになりました。

MPS認証には生産者向けのMPS-Florimark Productionと小売店や流通業者、加工業者向けのMPS-Florimark Tradeがあり、最近になって卸売市場の卸売業者向けのMPS-Florimark Auctionという新たな認証が追加されています。各カテゴリーには、下図のように、いくつかの認証プログラムがあり、各カテゴリーにあるすべての認証を獲得するとMPS-Florimark ProductionやMPS-Florimark Auction、MPS-Florimark Tradeの認証が与えられます。なお、運送事業者向けの認証なども研究されていると聞いています。



◆MPS-Florimarkの歴史

詳細については後に整理しますが、その前に、この認証制度の歴史について私が知るところを簡単に紹介しましょう。

MPS-FlorimarkはもともとMPS認証とFlorimark認証の2つの認証が合併して生まれています。どちらもオランダの花き業界で生まれ、前者は生産者を対象として、後者は小売業者等を対象としたものでした。オランダはいち早く環境問題に取り組み、国民の関心も高い国ですが、1990年台初頭のこと、環境関係のNPOがオランダの花き業界に対してアンチキャンペーンを張りました。

1980年代、欧州では酸性雨や水質汚染が問題になり、1991年に欧州連合（EU）は硝酸指令（農業起源の硝酸による汚染からの推計の保護に関する閣僚理事会指令）を公布しています。この指令は、地下水と表層水（河川や湖沼の水）の水質をモニタリングし、一定数値以上の硝酸を含む表層水等が集まる地域を脆弱地帯として指定し、指定地と指定地以外で各々改善のための行動計画を示すよう、EU参加加盟国に指示するものです。地下水等の窒素汚染は、工業廃水や生活排水、農地への施肥や家畜の糞尿の野外放置が原因と言われ、当時、工業廃水や生活排水への対策はかなり進んだ結果、農業起源の窒素汚染の実態が浮き彫りになっていました。それも、牧畜が盛んなデンマークやオランダなどの窒素汚染が深刻な状況でした。また施設

園芸も露天の農業に比べて施肥量が多く、施肥された肥料分の大半は地中や河川に排出され、重大な汚染源であることが判明していました。これが花き業界へのアンチキャンペーンを生んだのです。生活水を汚染する花き産業という具合に、です。

いっぽう、オランダの花き生産はケニアなど、海外に進出する流れが進んでいました。そのケニアでは、オランダで使用が禁止されているものを含めて、各種の農薬が大量に使われていたのです。これに対して、「オランダは環境破壊を輸出している」といったキャンペーンも張られました。

これらのキャンペーンに対して、導入されたのがMPS認証でした。それは、ウエストランド市場が始めた仕組みで、MPS認証プログラムに参加する生産者は窒素およびリン酸の施用量、農薬の種類と使用量などを日々記録し、その記録をウエストランド市場に報告することを義務付けました。そして、市場は項目ごとに基準値を定め、実績に応じてポイントを与え、総合ポイントによりA、B、Cのランクを認定しました。例えば、バラの切り花生産では、窒素の施用実績をもとに基準値を最小500kg/ha･yearから最大2,000kg/ha･yearのように定め、最小値以下を満点にして、それ以上は施用量に応じたポイントを与えます。また、この基準値は公表され、基準値が生産者の改善目標になることで全体の使用量が減少に向かうというものです。

MPS認証は農薬や肥料の使用量を確実に減らしてゆきましたが、あるスーパーがMPS認証の花を積極的に販売し、やがてMPS認証以外の花は販売しないことを宣言したことで普及に勢いがつきました。MPSを推進してきた組織はウエストランド市場から財団として独立し、欧州ばかりか、欧州に花を輸出する国々の生産者がこのプログラムに参加するようになりました。

MPS認証が普及する欧州にあり、オランダ花き業界の流通・小売業者も独自の認証システムを生みだしました。それがFlorimark認証で、その中身はISO9001を意識したものでした。そして、MPSとFlorimarkは2004年に合併し、MPS-Florimarkとして再出発することになります。

いっぽう、食品業界では、O157が1982年に米国で発見され、1986年にはBSE問題が持ち上がり、食の安全に対する意識が急速に高まります。そこで再評価されてきたのがハセップ(HACCP)と呼ばれる管理手法です。Hazard Analysis（食品の生産、出荷までの工程の中で、各々の工程における事故の発生を予測）とCritical Control Point（危険を回避するのに、どの時点で何をどのようにチェックすればよいかを定め、マニュアル化することで不測の事故を未然に防ぐ）を組み合わせた工程管理の手法で、もともとは1960年代のアポロ計画の実行にあたり、宇宙食を生産するために考案されたものです。食の安全に不安が持たれる時代になって、その手法が再評価され、1992年にはEUREP（ユーレップ）（Euro-Retailer Produce Working Group：欧州小売業者農産物作業グループ）がHACCPをベースにした優良農業規範（GAP：Good Agricultural Practice）を策定しました。これをEUREPGAP（ユーレップギャップ）と呼びます。

EUREPGAPは世界各国に普及し、2007年9月よりGlobal GAPと名前を改めています。以上のように、EUREPGAPは食品の衛生を確保するための管理手法ですが、花き類の生産、流通をもカバーするようになり、MPS－FlorimarkはGlobal GAPの花きに関するベンチとして認証されるようになりました。

なお、日本におけるMPS-Florimarkは、MPSフローラルマーケティング株式会社がその窓口を担当しています。業務内容は認証の授与やロゴなどの管理となっています。そして、検査業務はECAS（Europese Certificatie-instelling voor de Agrarische Sector： 農業関連ヨーロッパ認定機関）が担当しています。ECASはオランダに本部があり、ISOなどの検査も行う機関で、本部で研修を受けた日本人スタッフが日本での検査を担当しています（なお、この10月にMPS-FlorimarkとECASは合併した）。

◆マネジメントシステム規格

HACCPの仕組みは ISOやGAP、などの認証制度に引き継がれています。いずれも、業務分析を行い、どこにどの様なリスクがあるか洗い出し、そのリスクを避けるために何が必要で、必要なことをキチンと行っているかをチェックするためのポイントを定めます。あとは、定められたポイントで定められたチェックを行うことで全体を管理できますし、第三者がチェックを行うことでその精度は更に高くなります。

現在、この手法は様々な場面に利用されています。平成19年に生まれた金融商品取引法（J-SOX法）では株式を公開する企業に内部統制報告書の公開を義務付けていますが、内部統制は目標管理に加えてリスク管

理を重視しており、リスク管理の実効性を高めるためにこの手法が利用されています。

また、これらの認証ではPDCAサイクルの手法を導入していることでも共通しています。PDCAはPlan / Do / Check / Actionの頭文字をとったもので、行動計画を策定して実行し、途中で計画の進行状況や実行による成果等を分析し、改善点を見いだして行動に移すことを、毎年、繰り返して行うことで、改善を進めるという手法です。MPS-FlorimarkもPDCAサイクルの手法を取り入れており、毎年1回の検査を行い、PDCAサイクルが機能しているかどうかが重要なチェックポイントになるはずです（認証取得後に検査はまだ行われていない）。

◆MPS-Florimarkの内容

MPS-Florimarkは前記のように、生産者向けと市場向け、流通業者向けの3種類があり、それぞれに幾つかのクラスがあります。生産者向けのMPS-Florimark Productionでは4種類あり、当初のMPSが始めたプログラムはMPS-ABCとして継続されています。そして、MPS-ABCを除くすべての認証がマネジメントシステム規格の仕組みを採用しています。

まず、MPS Productionの4種類はMPS-ABCとMPS-Q、MPS-SQ、MPS-GAPです。MPS-ABCは環境に関するプログラムであり、プログラムに参加した生産者は窒素とリン酸の施用量、エネルギーの消費量を報告する義務があり、検査では肥料や農薬の管理、廃プラスチックの処理、水の消費や排水の処理方法などもチェックポイントになっています。MPS-Qは品質管理に関するプログラムです。採花後の処理や温度管理などの規範があります。MPS-SQは社会規範に関するプログラムで、労働衛生の確保など、法令遵守に重点を置いたものです。最後のMPS-GAPはトレサビリティーの確保を目指すものです。

MPS Tradeは流通や小売向けのシステム認証です。MPS-Trace CertとMPS-GTPがあり、前者はトレサビリティーに関するもの、後者はトレサビリティーに品質管理や労働衛生などを加えた認証です。MPS-GTPでひとつ例を示しましょう。花屋さんにおける品質管理の向上を目標とした時、品質劣化に関係する作業や環境などを分析し、どの時点で何をチェックすればよいかを決めます。切り花でいえば、市場からお店まで搬送するトラック内の温度、店に着いてから冷蔵庫に入れるか、水揚げするまでの時間、水揚げに使う水の温度や水質、殺菌剤の有無、水揚げの方法、店頭での温度管理の有無、等々が切花の品質を左右する要因です。これらのポイントに於ける理想的で、かつ実現可能な管理方法を規範として明文化し、その規範に従ってチェックを行うことになります。

我々が取得したMPS-GPAはMPS Auctionのプログラムです。MPS TradeのMPS-GTPに相当するものです。市場の卸では在庫を持たないなど、他の流通業者と異なる部分が多いことにより、MPS-GPAが生まれましたが、その内容はMPS-GTPに相似しています。

MPS-GTPまたはMPS-GPAを取得した企業がISO9001:2000を追加取得すると、それぞれMPS-Florimark TradeまたはMPS-Florimark Auctionの認証を得ることになります。

◆最後に

現在、MPS-Florimarkの認証プログラムに参加する企業・個人は150社を超えたといいます。市場関係では10数社が取得に向けて準備を始めたと聞きます。MPS-Florimarkへの参加者は順調に増えていますが、MPSフローラルマーケティング株式会社では、MPSに参加することは有利販売につながり、国産花きの保護にも貢献できると言って勧誘しています。しかし、それは間違いと考えます。『国産花きの保護に･･･』云々についていえば、まず、店頭に並ぶ花は8割以上が国産であるのに、Made in Japanがどれだけの価値を生むのか考えれば答えは明らかです。『有利販売につながる』云々についても、消費者がMPSを認識しない限り付加価値になりませんし、仮に周知が行き届いたとしても、MPSは絶対的な評価でなく、相対的な評価であるという構造があります。MPS-ABCのAランク取得は意味がありますが、Cランクはマイナス価値を生む可能性さえあり、いっぽうのシステム認証においてはほぼ現状で（ほとんど改善することなく）、ひとまずMPS認証は取得できます。

弊社においても、MPS-GPAを取得することが目的でなく、自ら業務改善を行うにあたり、そのきっかけになればという目的から取得に向かいました。

以上のように、まだ多くの問題がありますが、MPS-Florimarkの利用価値は高いと考えており、日本に定着することを願っています。

千葉県立中央博物館収蔵・岩佐亮二コレクション（浮世絵）

千葉県立中央博物館　上席研究員
御　巫　由　紀

千葉県立中央博物館では、故岩佐亮二元教授（園芸学科育種学研究室）のご生前、三位正洋教授のご紹介で平成9年に、浮世絵126点、和漢書約130点の資料を購入させていただき、またあわせて約860点の昭和・平成の書籍をご寄贈いただきました。平成15年に岩佐元教授はご逝去されましたが、長女・大井園子様よりご自宅に残っていた浮世絵1点（歌川豊国（三代）「市美弥景姿の福贔屓」）が翌年、寄贈されました。本コレクションは平成12年企画展「植物画の世界～園芸植物とプラントハンター～」等で展示し、また、中央博物館ホームページhttp://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/でも「デジタルミュージアム・浮世絵に見る江戸時代の園芸」として公開して好評を得ています。

平成19年には千葉市立美術館学芸課長・浅野秀剛氏（現在は大和文華館館長）のご協力により、浮世絵127点を詳細に調査しました。その結果、コレクションの内訳は歌川豊国（三代）等のオリジナル72点、後年複製された木版画33点、カラー印刷による複製画22点でした。浅野氏によれば最も注目すべき資料は、文化年間（1804～1818）に制作された堤秋月（琳好斎秋月）の「大黒の植木売り（仮題）」で、これが岩佐亮二コレクションの中では最も古いものです。堤秋月はあまり知られていませんが千葉にゆかりのある絵師で、県内に絵馬等も残っているということです。

題	作者等	描かれた植物	制作時期	備考	登録番号
「蘭花図」	管遣昇（天水道昇）	ラン	元禄年間頃（1688～）	複製木版（雑誌「国華」？）	115
「庭の菊おやしき風」	影花堂　西村重長	キク	享保年間（1716～1736）	複製木版（手彩色）	70
「新吉原座敷けんずもう」	古山師政	タケほか	寛保・延享・寛延頃（1741～1751）	複製木版（足立版）	124
「浮絵新吉原之図」	鳥居清満（版元：西村屋）	サクラ、マツ	宝暦年間（1751～1764）	複製木版	128
「かほよばな」	鈴木春信	セキチク、カキツバタ	江戸後期	複製木版	16
「髪洗い」	鈴木春信	カキツバタ	江戸中期	複製木版	24
「三十六歌仙　中納言朝忠」	鈴木春信	盆栽	明和年間（1764～1771）	複製木版（足立版）	58
「見立鉢の木」（片面、左のみ）	鈴木春信	マツ、ウメ（鉢木）	不明（江戸時代）	カラー印刷	107
「めだかすくい」	鈴木春信	コウホネ、カキツバタ	不明（江戸時代）	複製木版	109
「八ツ橋」	鈴木春信	カキツバタ（八橋）	不明（江戸時代）	複製木版（雑誌「国華」）	111
「見立鉢の木」（両面）	鈴木春信	マツ、ウメ（鉢木）	不明（江戸時代）	カラー印刷	116
「見立八ツ橋」	鈴木春信	カキツバタ（八橋）	不明（江戸時代）	複製木版	118
「風流六哥仙　僧正遍照」	鈴木春信	ハス	明和年間（1764～1771）	複製木版	82
「螢狩り」	鈴木春信	コウホネ、カキツバタ	明和５年（1768）	カラー印刷（平木コレクションから複製）	97
「役者絵二代目市川高麗蔵と山下金作」	一筆齋文調	ウメ	明和６年（1769）	複製木版	121
「かぎ屋御せんじ茶」	一筆齋文調	セキショウ？	江戸後期、1770 年頃	複製木版	15
「中あふみや内　半太夫」	一筆斎文調	マツ、キク	明和年間末（1770 年頃）	複製木版（足立版）	69
「小なつ　高むら」	一筆斎文調	スカシユリ	不明（江戸時代）	複製木版	119
「菊見」（仮題）	磯田湖龍齋	キク	安永初期、元～2 年（1772～1773）	複製木版	29
「品川君姿八景」	北尾重政	シャクヤク	安永５年（1776）頃	複製木版（足立版）	46
「蚊遣り」	磯田湖龍齋	カキツバタ	不明（江戸時代）	カラー印刷	25
「座敷八景　鏡たいのあきのつき」	勝川春山	盆景	天明後期～（1780～1790 頃）	複製木版	39
「芝居絵　一寸徳衛　市川門之助」	北尾政演（戯作家　山東京伝）	ハギ、マツ	天明年間（1781～1788）	カラー印刷	6
「菖蒲の池」	鳥居清長	ハギ、ハナショウブ	不明（江戸時代）	複製木版（足立版）	123
「風俗東之錦　（植木福寿草売り）」	鳥居清長	フクジュソウ、ウメ、マツ	天明3～4 年（1783～1784）頃	複製木版（足立版）	84
「風流花之香遊下」	喜多川歌麿	ハギ	天明年間（1781～1788）	カラー印刷	81
「庭中の涼み」	喜多川歌麿	マツほか	天明８～寛政２年（1788～1790）頃	複製木版（五葉版）	59

「四季の美人　蛍狩り」	栄松斎長喜	カキツバタ	寛政年間（1789～1801）中期	複製木版（足立版）	125
「菊見の美人」	歌川豊国（初代）	キク	江戸後期、寛政年間（1790年頃）	複製木版（雑誌「国華」）	28
「浮世源氏八景　明石秋月」	鳥文斎栄之	盆景	江戸後期、1790 年代	複製木版（大正5年4月）	7
「六歌仙　小町」	鳥文斎栄之	マツ、サクラほか	不明（江戸時代）	複製木版	117
「写生図」	圓山応挙（版元：西村総左衛門）	ツツジ	江戸	カラー印刷	47
「五節集」	勝川春潮	キク、マツ	寛政 3～4 年（1791～1792）	カラー印刷	35
「浴恩園　松平定信庭園図」	作者不明	サクラ、マツほか	江戸	カラー印刷	102
「初日の出」	栄松斎長喜	フクジュソウほか	寛政年間中期（1794～1795）	複製木版（足立版）	78
「郭中美人競　松葉屋染山」	鳥高齋栄昌	サクラ	江戸後期	カラー印刷	23
「松葉屋　瀬川」	喜多川歌麿	ハナショウブ	享保年間（1801～1804）	カラー印刷	100
「千代鶴」	喜多川歌麿	マツ、セキショウ？	不明（江戸時代）	カラー印刷	120
「大黒の植木売り（仮題）」	堤秋月（琳好斎秋月）（版元：鶴屋金助）	フクジュソウ、ウメほか	文化年間（1804～1818）	オリジナル	50
「坂東三津五郎の最明寺時頼と中村芝翫の源左衛門妻白妙　」	歌川豊国（初代）	マツ、ウメ(鉢木)	文政年間前期（1818～）	オリジナル	74
「伝心画鏡」	葛飾北斎	フクジュソウ、ウメ、ビワ、コウホネ、キキョウ、カキツバタ、ボタン	文政元年（1818）	オリジナル	60
「黄鳥長春」	葛飾北斎	イザヨイバラ	江戸後期	カラー印刷	31
「萬年春寿」	葛飾北斎？	盆栽	不明（江戸時代）	複製木版	101
「江戸名所尽　梅屋敷臥龍梅開花ノ図」	渓斉英泉（版元：万吉）	ウメ、マツ	天保年間（1830～1843）	オリジナル	10
「東海道五十三次之内　鞠子　名物茶店」	歌川広重（初代）	ウメ	天保 3～6 年（1832～1835）	カラー印刷	62
「東都名所亀戸梅屋舗ノ図」	歌川広重（初代）（版元：佐野屋喜兵衛）	ウメ	江戸後期、1830 年代終わり頃～	オリジナル	22
「五節文章　菊月の文」	胡蝶園春升（版元：田中）	キク	弘化年間（1840 年代）	オリジナル	36
「五節句之内　九月重陽の菊」	渓斉英泉	キク	天保 14～弘化元年（1843～1844）頃	オリジナル	33
「江戸名所　亀戸天満宮」	歌川広重（初代）（版元：有田屋）	フジ、マツ	弘化 1～3 年頃（1844～1846）	オリジナル	21
「小倉擬百人一首　持統天皇」	歌川国芳	マツ、ウメ（鉢木）	弘化 1～3 年頃（1844～1846）	オリジナル	14
「鉢の木」	歌川国芳	マツ、ウメ（鉢木）	天保 15～弘化 3 年（1844～1846）	オリジナル	75
「田舎源氏見立」	歌川広重（三代）	サクラ、マツほか	嘉永年間（1848～1854）	オリジナル	79
「江戸名所之内　浅くさ観世音雷神門」	歌川国綱	マツ	嘉永年間（1848～1854）	オリジナル	42
「春のあした　生花稽古」	歌川豊国（三代）	ウメ、ツバキ	嘉永年間（1848～1854）	オリジナル	72
「市美弥景姿の福晶屓」	歌川豊国（三代）	フクジュソウ、ウメ、マツ、マツバランほか	嘉永年間（1848～1854）	オリジナル	129
「役者雨宿図」	歌川豊国（三代）（一陽斎）（版元：えびすや）	ウメほか	嘉永年間（1848～1854）	オリジナル	113
「春宵梅ノ宴」	歌川豊国（三代）（版元：林庄）	ウメ、ツバキ、フクジュソウ、スイセンほか	嘉永年間（1850 頃）	オリジナル	48
「新版箱にわつくし（おもちゃ絵）」	歌川芳綱（一長斎）（版元：上州屋岩蔵）	マツほか	嘉永 6 年（1853）6 月	オリジナル	76
「四季花くらべの内　秋」	歌川豊国（三代）（版元：辻安）	オミナエシ、ススキ、フヨウ、シバ、キキョウほか	嘉永 6 年（1853）	オリジナル	49
「名所江戸百景　堀切花菖蒲」	歌川広重（初代）	ハナショウブ、マツ	安政年間（1854～1859）	複製木版	91
「清書七伊呂婆　ゆ」	歌川豊国（三代）	マツ、ウメ（鉢木）	安政年間（1854～1859）頃	オリジナル	54
「名所江戸百景　千駄木団子坂花屋敷」	歌川広重（初代）	サクラ、マツ	安政 3 年（1856）	カラー印刷	53
「名所江戸百景　飛鳥山　北の眺望」	歌川広重（初代）（おそらく初代広重）	サクラ	安政 3 年（1856）	カラー印刷	3
「名所江戸百景　綾瀬川鐘ヶ渕」	歌川広重（初代）	ネムノキ	安政 4 年（1857）	カラー印刷	5
「名所江戸百景　亀戸梅屋舗」	歌川広重（初代）	ウメ	安政 4 年（1857）	カラー印刷	19
「名所江戸百景　深川八まん山びらき」	歌川広重（初代）	サクラ、マツ	安政 4 年（1857）	カラー印刷	85
「江戸名所百人美女　かやば町」	歌川豊国（三代）（コマ絵は歌川国久）（版元：藤岡屋慶次郎）	ウメ、ナンテン、マツ、オモト	安政 4 年（1857）11 月	オリジナル	26
「名所江戸百景　秋葉の境内」	歌川広重（初代）	カエデ、マツ	江戸後期	カラー印刷	4
「名所江戸百景　真間の紅葉　手古那の社継はし」	歌川広重（初代）	カエデ、マツ	安政年間	カラー印刷	104
「色紫梅蝶源氏五節句月夜之雨さつきの八ツはし」	歌川国貞（二代）（版元：山口藤兵衛）	カキツバタ（八橋）	安政 5 年（1858）3 月	オリジナル	112
「草花植木づくし（おもちゃ絵）」	歌川芳藤（版元：文正堂）	ボタン、キク、スイセン、マツ、アジサイほか	安政 5 年（1858）2 月	オリジナル	56
「四代目尾上菊五郎の顔世御前、三代目沢村田之助の彦太夫娘おくみ、初代中村福助の早野勘平」	歌川豊国（三代）（版元：イセ芳）	マツ	安政 6 年（1859）　5 月	オリジナル	51
「江戸名勝図會　亀井戸天神」	歌川広重（二代）	フジ、マツ	文久年間（1861～1862 頃）	オリジナル	12
「江戸名勝図會　染井」	歌川広重（二代）	キク、マツ	文久元年～元治元年（1861～1864）	オリジナル	57
「菊に黄島」	歌川国貞（版元：宝来舎）	キク	江戸後期、幕末（酉年、1861？）	複製木版	30
「東都三十六景　亀戸天満宮」	歌川広重（二代）	フジ、マツ	文久 2 年（1862）	オリジナル	66
「江戸紫ゆかりの菊盛」	歌川国明	キク、マツ	文久 2 年（1862）9 月	オリジナル	11
「江戸自慢三十六興　堀きり花菖蒲」	歌川豊国（三代）（人物）・広重（二代）（背景）	ハナショウブ、マツ	元治元年（1864）	オリジナル	13
「南港松の賑い」	歌川豊国（三代）・広重（二代）	マツ、シュロ、サボテンほか	元治元年（1864）	オリジナル	105
「江戸自慢三十六興　深川八まん　牡丹」	歌川豊国（三代）・広重（二代）（版元：平野屋）	ボタン、マツ	元治元年（1864）7 月	オリジナル	86
「三十六花撰　東京堀切花菖蒲」	喜斎立祥（二代広重の改名）（版元：蔦吉）	ハナショウブ、マツ	慶応 2 年（1866）寅七改	オリジナル	67
「三十六花撰　東都入谷朝顔」	喜斎立祥（二代広重の改名）（版元：蔦吉）	アサガオ	慶応 2 年（1866）	オリジナル	68
「東京名勝図會堀切里花せうぶ」	歌川広重（三代）	ハナショウブ、マツ	明治元年または 2 年	オリジナル	92

「亀戸梅屋敷」	歌川広重(三代)	ウメ	明治	オリジナル	18
「亀戸天神の社」	歌川広重(三代)	フジ、マツ	明治	オリジナル	20
「朝顔」	歌川広重(三代)(注※ 広重二代の可能性もあり:浅野秀剛氏)	アサガオ	幕末～明治	オリジナル	1
「東京三十六景 亀井戸臥竜梅」	昇斎一景	ウメ、マツ	明治初期	オリジナル	61
「東京三十六景 堀切花しょうふ」	昇斎一景	ハナショウブ、マツ	明治初期	オリジナル	93
「志ん板植木づくし(おもちゃ絵)」	歌川国晴(版元:児玉弥吉)	フジ、マツ、ボタンほか	明治 10～30 年頃	オリジナル	40
「梅花集番付」	染井 伊藤留次郎	ウメ(品種名)	明治 11 年 10 月	オリジナル	127
「新柳二十四時 午後二時」	大蘇芳年	ウメ(実)	明治 13 年	オリジナル	43
「東京真画名所図解 堀切」	井上安治 東京	ハナショウブ、マツ	明治 15 年頃	オリジナル	65
「花鳥競 はせお 霖 鶏」	琳斎	バショウ、アサガオ、オオバコ	明治 15 年	オリジナル	27
「名誉色咲分 尾州楼小町 仲の町〆子」	楊洲周延(彫:宗岡)	ウメ、タケ	明治 16 または 17 年	オリジナル	110
「雪月花 野州 佐野雪 西明寺佐野源左衛門 妻白妙」	楊州周延(版元:小林鉄次郎、画工:橋本直義)	マツ、ウメ(鉢木)	明治 18 年 3 月	オリジナル	55
「花やしき秋のはなぞの」	歌川広重(三代)	マツ	明治 20 年代	オリジナル	73
「新版はちうへ尽(おもちゃ絵)」	作者不明(版元:綱島亀吉)	サクラ、マツ、ボタン、ウメほか	明治 21 年 4 月 20 日	オリジナル	77
「風俗三十二相 かいたさう」	大蘇芳年(版元:綱島亀吉)	フクジュソウ、ウメ	明治 21 年	オリジナル	83
「秋園の菊花」	楊州周延(版元:永松作之助)	キク、カエデ、マツ	明治 21 年 9 月	オリジナル	44
「佳人音曲之図」	楊洲周延(版元:横山良八)	キクほか	明治 21 年	オリジナル	17
「皇国貴顕鑑」	作者不明(版元:綱島亀吉)	ツバキ、ウメ、スイセン	明治 22 年	オリジナル	34
「新版うえ木尽(おもちゃ絵)」	歌川国利(版元:森末順三郎)	ボタン、アサガオ、ツバキ、マツ、オモトほか	明治 22 年 10 月	オリジナル	8
「東風俗 福つくし 福わらひ 」	楊洲周延	フクジュソウ、ウメ	明治 22 年	オリジナル	88
「東風俗 福つくし ふくどく 」	楊洲周延	マツ	明治 22 年	オリジナル	89
「富家之別荘」	楊洲周延(版元:彫銀)	サクラほか	明治 22 年 4 月	オリジナル	80
「浴恩園千秋館之図」	瑞雨(縮写)	サクラ、マツほか	明治 23 年 2 月 10 日	カラー印刷(「風俗画報」)	114
「教育女礼式之図」	東洲勝月	ボタンほか	明治 23 年	オリジナル	32
「女礼式之図」	楊斎延一	ウメ、ツバキほか	明治 23 年 12 月	オリジナル	71
「東風俗年中行事 五月」	楊州周延(版元:長谷川国吉)	ハナショウブ、マツ	明治 23 年	オリジナル	37
「東風俗 福つくし 福寿草 」	楊洲周延	フクジュソウ、ウメ	明治 23 年	オリジナル	87
「東風俗福つくし ふくりん」	楊洲周延	アサガオ、マツ	明治 23 年	オリジナル	90
「江戸風俗十二ヶ月の内 九月染井菊造りの元祖」	楊洲周延(版元:横山良八)	キク、マツ	明治	オリジナル	9
「三十六佳撰目次」	作者不明(版元:秋山武右衛門)	サクラ、カエデ	明治 26 年	オリジナル	38
「新版盆栽庭尽」(おもちゃ絵)	作者不明(版元:松野米次郎)越米版	サクラ、マツほか	明治 28 年	オリジナル	98
「東京名所 堀切菖蒲井ニ梅若塚」	長野利助(版元:大阪 森川柔三郎)	ハナショウブ、マツ	明治 31 年	オリジナル	64
「東京名所 団子坂のきく」	楊州周延(版元:勝木吉勝)	キク	明治 35 年 2 月 10 日	オリジナル	63
「室町千代紙」	いせ辰、室町千代紙	ススキ、ウメ、キク	大正以降	オリジナル	108
「四季の庭(仮題)」	作者不明	サクラ、カエデ、ウメ、ツツジ、フジ、ボタンほか	大正以降	オリジナル	45
「獅子八重」	其堂(東京旭豊園)	アサガオ	大正元年 9 月 1 日	オリジナル	41
「風鈴咲獅子牡丹」	其堂(東京松岡長義)	アサガオ	大正 2 年 8 月 80 日	オリジナル	95
「青林風抱変化葉濃紅総風鈴獅子」	其堂(東京野集園)	アサガオ	大正 2 年 8 月 27 日	オリジナル	52
「牡丹」	河原崎奨堂、芸艸堂版、摺・新味、彫・長島	ボタン	昭和 30 年頃	オリジナル	94
「法相宗秘事絵詞」	作者不明	タケ、ヤナギ	不明	複製木版(雑誌「国華」)	96
「清香四溢」	作者不明	キク、タケ	不明	オリジナル	126
「松(仮題)」	菊川英泉	マツ	不明 (江戸時代)	複製木版(雑誌「国華」?)	106
「秋草」	石垣抱眞	ユリ、センノウ、アサガオ、オミナエシ	不明	複製木版(雑誌「国華」)	2
「松下弾琴図」	沈石田(中国人)	マツ、タケほか	不明	複製木版(雑誌「国華」?)	103

資料は制作時期の年代順に表示

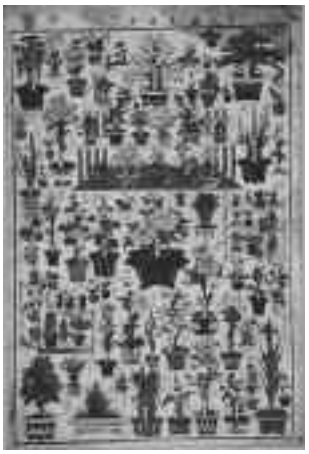
「大黒の植木売り（仮題）」
堤秋月（琳好斎秋月）（版元：鶴屋金助）
文化年間（1804～1818）

「五節文章　菊月の文」
胡蝶園春升（版元：田中）
弘化年間（1840年代）

「市美弥景姿の福畠扇」
歌川豊国（三代）
嘉永年間（1848～1854）

「春宵梅ノ宴」
歌川豊国（三代）（版元：林庄）
嘉永年間（1850頃）

「四季花くらべの内　秋」
歌川豊国（三代）（版元：辻安）
嘉永6年（1853）



「草花植木づくし（おもちゃ絵）」
歌川芳藤（版元：文正堂）
安政5年（1858）2月

お客様が求める植物そして園芸店とは？

㈲ヨネヤマプランテイション
椎　名　亜　紀

はじめに

私の勤めている㈲ヨネヤマプランテイションは、総合園芸（ただし切花はありません）とペットを扱うお店（小売店）を、関東圏に11店舗（そのうち園芸を扱う店舗は５店）、ちょっと離れて仙台に3店舗、営業しています。あと、本店には、貸植木、造園、園芸卸もあり、さらに近年オンラインショップも始めています。

入社以来、ずっと園芸事業部の所属ですので、正直言ってペット事業部の事は残念ながら、よくわかりません（家では猫を8匹飼っていますので、ヘビーユーザーの立場としてなら、いろいろコメント出来ますけれども。猫ボランティアをやっていますので、相談や仔猫を欲しい方はどうぞご連絡をお願いします）。

勤続15年　お客様の好みも変化

私は平成5年に入社しました。当初はこんなに長く勤めることになるとは予想もしていませんでした。満員電車で通勤するのはいやだったので、比較的家から近くで働けそうな所を選んだだけです。かなり軽い気持ちでした。

ところが、私の予想よりもはるかにそこは戦場でした。今考えてみると、バブルがはじけた直後くらいで、ガーデニングブームのはしりの頃ということになるのでしょうか？　サフィニアが発売されてまだ間もなくて、色もパープルとパープルミニしかなかったのを覚えています。

それまで、自分で花を買う時はせいぜい近所のお花屋さんぐらいしか行った事がなく、“郊外型ガーデンセンター”なるものに足を踏み入れたのはこれが初めてと言ってもよいくらいだったのですが、いや、人の多いこと！　レジは長蛇の列ですし、はっきり言ってあっけにとられてしまいました。

でも、そんな花屋さん1年生の私にも、お客さんの質問はどんどん飛んできます。

「マリーゴールドはどこにあるの？」ぐらいなら、すぐにも答えられますが、

「いつまで咲くの？」とか、毎年咲くかどうか、日々のお手入れなどなど、なんでも聞かれます。お客様から見たら、5年とか10年勤めている人も、1年目の私も、同じ“花屋さんというプロ”に見えるわけですから。この時、「1000属をやっていて本当に良かった」と思い、同時に「ぜんぜん足りない。勉強しなきゃ」とも思いました。

その後、ハーブのブームやコニファーのブーム、ウッド素材のラティスやフェンスの爆発的流行、イングリッシュガーデンの大きな波がやってきましたね。90年代の後半ぐらいから、どんどん新しい植物が紹介されるようになり、調べるのが大変でした。今はインターネットがあるのでとても助かります（間違いもありますが･･･）。

現在はバラ（オールドローズ、イングリッシュローズ）、クリスマスローズ、クレマチスで

卸部の入り口から。回転が命ですから、とにかく目に付きやすいように、毎日のように配置が変わります。孔雀アスターの大鉢、ウメモドキ、到着したばかりのマリーゴールドは台車積みで

卸部　風知草や秋明菊、ノボタンやツルコケモモなどが並んでいます。奥のほうにオリーブなど背が高めの木で定番のものが

しょうか？　カラーリーフの樹木類（ハナズオウ‘フォレストパンジー’やテマリシモツケ‘ディアボロ’、ネム‘サマーチョコレート’、ナンキンハゼ‘メトロキャンドル’など）や、草花（ツボサンゴやティアレラ、ブルネラなど）も人気があるようです。今の住宅事情から、どうしても洋風の物の人気が高く、和風の物は敬遠されがちなのですが、ギボウシ（ホスタ）の再発見など、捉え方ひとつで、見直しが出来ると思います。個人的には、ヤマアジサイ（日陰で良く、コンパクトにも大きくしても楽しめる）、ツバキ・サザンカ（花の少ない冬に咲き、侘び寂びの一重小輪からゴージャスな大輪までお好みに応じて）、ナンテンやヒイラギ（昔ながらの縁起物の解説をすると、若い方でも喜ばれるものですね）などは面白い素材になると思いますが。

また、特に若い世代の方に多いのですが、「とにかく常緑樹が良い」と言われるので、目隠しに使われるのかと思ってお尋ねすると、「それもあるけど、近隣の方と落ち葉で揉め事になりたくない」と・・・。常緑樹でもまったく落ち葉が出ない訳ではないことや、落葉樹の方が、季節の移り変わりを良く教えてくれることなどを説明すると、気持ちを変えられる方もいらっしゃるのですが、都会に近い住宅地とはいえ、なんだか寂しい気持ちになりますね。

質問に応えて買っていただく

今、私がいる所は、他の店舗と少しコンセプトが違います。バラを主体とした花木類、庭木、果樹などと、ハーブや宿根草、山野草などを主に取り扱っています。そして、花の時期が過ぎても処分したりせず、植え替えをしたり、農薬を撒いたりして、付加価値をつけて販売

卸部　アメジストセージやウィンターコスモスなど。温室の中はなぜか資材置き場と多肉植物が（他にも温室はあるのですが）

売店の入り口ですので、季節の花になっています。今（9月下旬）はやはり菊。まあるい小菊（ボサ菊）は変わらぬ人気。切花にもなる高性の菊は、どちらかというと、黄色や白のベーシックなものより、変り種（緑とか）の方が売れるような気がします

チャンスを狙っています。季節外でも色々な物を扱っていますし、通常取引されている物より大きく伸びているものが多いので、造園業の方たちにはことのほか喜ばれているような気がします。逆に花苗、球根、タネ、資材はほとんど扱っていませんので、それらが目的で来られた方は、がっかりされるかも？　その場合には、ありそうなお店を紹介したりします。来店される方たちは、バラその他が好きで好きでたまらないマニアな方から、初めて庭に何か木を植えてみようと思った方まで、さまざまです。

　そんな方たちのために、どんな質問にも答えられるプロフェッショナルなアドバイザーを目指しています。

「あのう～、すみません、この木ですけど･･･」

「はい、ええとオリーブですね。」

「庭に植えようと思うのですが、どうですか？」

「まあ、お家のどの部分に植えられるか、また地形などによっても変わってきますが。もともとは暖かいイタリアやスペインの方の木ですので、ものすごく寒さに強いわけではないんですよ。常緑ということになっていますが、場合によっては、葉が落ちることもありますし、今、庭に下ろしてもこれからどんどん寒くなりますよね。そうすると、土の中で根を張っていないので、寒さの害を受けやすいですから、できれば、今年の冬は鉢植えのままで、軒下などに入れてあげて、来年の春、暖かくなってからお庭に下ろすのをお勧めします」。

「大きくなりますか？」

「かなり大きくなりますよ～。特に混み合った所を冬の間に透かすように剪定すると、残った枝が良く伸びます。オリーブは切るほどに元気になる木ですから、細い枝なんかはどんどん切ってください。ただ、花芽は去年新しく伸びた枝につく場合が多いので、丸く刈り込んだりするのは、やめた方がいいですね」。

「実は付きますか？」

「できれば近くに違う品種が植わっているといいんですよ。これは‘ミッション’ですから、花粉の多い‘ネバディロブランコ’なんかがあるといいですね」。

「はあ、わかりました。じゃあこれを下さい」。

「ありがとうございます」･･･

園芸店のコンシェルジェを目指す

　困った時に（例えばうちで購入された物でなくても）「あそこの人に聞けば何とかなる」という安心を提供す

ることによって、リピーターになって頂けるといいなと思います。近年、人件費削減のために、ホームセンターなどでは専門知識のある人が減っているようですからね。

また、リスクのあるものはなるべく事前に伝えて、その上で選んでいただきたいと思っています。例えば、カリフォルニアライラック(セアノサス)はとてもきれいな青い花が人気の花木ですが、高温多湿が苦手だし、冬の寒風も得意じゃないので、鉢植えで場所を移動できるなら、わりと育つのですが、地植えだと難しいと思うのです。そういう事が判っていて、それでも育ててみようとチャレンジするのと、やみくもにきれいだからと買って、すぐに枯らしてしまうのでは、後に残る気持ちにずいぶんと違いが出てくると思いませんか？　通信販売のカタログや、ネットショップの説明を見ていると、いいことしか書いてなかったりしますよね(そんな時、つい「そんなうまい話があるかいな」とか一人つっこみをしてしまいます、しかも関西弁で)。

小売部山草コーナーでは、ちょっとシブく、大文字草のフェアをやっています

そのためにも、普段から情報収集を心掛けて、新しい植物を見かけた時には、育て方、原産地など、一通りのことを調べておくようにしています。幸い、調べものをするのが好きな性質ですし、調べたことをお客様に説明して、満足してもらえた時には、とてもうれしいものです。

購入されたお客様が、後日また来られて、「よく育っていますよ」とか、「あなたのアドバイスにしたがって、あの木を選んで良かった」とか言っていただけると、本当にこの仕事をしていて良かったなと思います。

さらにスキルをアップさせて、さながらホテルのコンシェルジェのように、どんなリクエストにも対応できるようになりたいです。

なお、写真では本店のようすを紹介します。

小売部入り口から少し奥に進んだ所で、サルビア類やルドベキア、エリカなど。だいぶ種類が増えました

さて突然ですが、私の好きなミステリのご紹介を･･･。

『にぎやかな眠り』シャーロット･マクラウド著

創元推理文庫

主人公で探偵を勤めるのは、飼料用のカブの品種改良で名を馳せたシャンディ教授です。バラクラヴァ農業大で応用土壌学を教えています。第1作では、クリスマス休暇で出かけている間に、自宅で殺人事件が起こり(被害者は同僚の教授夫人ですが、まわりから煙たがられていた、一癖も二癖もある人物)やむなく原因を調べ始めるはめに･･･。

シリーズになっていて、第2作では、バラクラヴァ郡の荷馬競争と品評会で優勝候補のブタの誘拐、第5作ではグラウンドホッグ・デー(冬眠中のグラウンドホッグをたたき起こして、その仕草で、春の到来を占うお祭り)というように、次々と新しい(農業大らしい？)楽しそうなイベントが描かれているのです。ミステリですから、殺人もおこりますが、肩がこらずに楽しめ、読後感も爽やかです。秋、いえ冬の夜長にいかがですか？

女性後継者として

イイダ園芸
飯 田 久 美 子

私は千葉県の北東部にある香取郡東庄町でガーベラと小菊の切り花生産をしています。ここは東京へは2時間、成田空港へは約1時間という便利な立地です。すぐ隣には銚子市があり、その先は太平洋です。

経営は私と父の二人で行っています。他に祖母がガーベラの出荷調整と少量の家庭菜園の管理を行い、パートを1人（ガーベラの出荷時のみ）雇用しています。

母は私が小学6年生の時に突然の病気で37歳という若さで亡くなりました。毎日元気に働き、ご飯などを作ってくれた母が、まさかいなくなるとは思ってもいなかったので、家族全員本当にショックでした。それからは祖母が母の代わりとなって家事や仕事を行ってくれ、私たちもできるだけの手伝いをしていました。パートナーを喪った父も精神的、体力的にとてもつらかったはずですが、私たち家族のために毎日必死に働いていたように思います。

私は次女で、本来なら姉が後を継ぐことになっていましたが、急な結婚により嫁いでしまいました。いろいろ悩みましたが、父の負担を少しでも軽くするために、私が継ごうと決意しました。

露地圃場とハウス全景

我が家の切花栽培は祖父が昭和40年頃始めました。当時は30坪の温室で枝物（レンギョウ、ハナモモ、柳類等）の促成栽培と小菊を生産していましたが、平成元年に東総用水の畑地かんがい施設整備事業が始まったのを機に、両親が150坪のパイプハウスでガーベラの試作を始めました。少しずつ規模を広げ、現在は730坪の鉄骨ハウス3棟でガーベラの切花栽培を、65ａの露地で小菊、約60坪のパイプハウスでイタリアンルスカスを生産しています。水田7反は貸し付けています。

ガーベラ栽培について

我が家では2カ年据置周年の土耕栽培で、年間約40万本出荷し、現在大輪2品種、小輪17品種を栽培しています。

毎年、施設面積の半分を改植するのですが、ガーベラ栽培が始まってから20年経っていると、連作障害によると思われる生育障害が発生してきます。具体的には花茎の伸長不良や株枯れ（ネコブセンチュウ等）などです。当園では、改植前の土壌へ牛糞堆肥や窒素やカリを施用しており、結果として若干リン酸過剰、カリ過剰がみられます。ガーベラ栽培では市場のニーズに応えられるように少量多品種生産が主流であり、1棟の施設に数品種栽培されています。また、栽培期間が長いことから計画的に湛水による除塩や休閑をすることが困難であり、これらが連作障害を引き起こす原因と考えられています。

また、ネコブセンチュウや株枯れが2年目になると多発し、収量を減少させるケースが多くなります。普及所の指導により、土壌改良、土壌消毒、発生箇所と思われる株へのアオバの灌注などの対策を講じていますが、いまだ解決には至っていません。

ガーベラの収穫作業

ガーベラは害虫による加害も多く、かつてはアブラムシやハダニ類の防除に苦慮したそうですが、最近ではマメハモグリバエ、オンシツコナジラミ、タバココナジラミ、アザミウマの被害が深刻となっています。

これらの害虫は併発することが多く、有効な防除薬剤も少ないことから、大きな被害を受けることがあります。農薬に頼る防除ばかりでなく、総合的な防除体系の確立も重要な課題です。

ガーベラの出荷調整（写真奥が祖母）

以前、とある産地に視察に行った時に、職員の方がこうおしゃっていました。「これからは“どうやって病害虫を抑えるか”から“病害虫を発生させない為にはどうするか”といった考え方の大転換が必要となる。その第一歩が土壌管理となる」と話して下さいました。細かいことまではまだ理解できなかったものの、これからの参考にしていきたいです。

環境のためにも薬剤を使わない土壌還元消毒に注目していますが、消毒日数がかかり改植時期がずれてしまうことなどから、なかなか実行までたどりつけません。しかし、土のリフレッシュのためにも今後挑戦してみたい課題のひとつです。

無花粉ガーベラデビュー

最近、カビの発生原因となる花粉が出ないガーベラが市場にデビューしました。“かわいらしい”と若い女性から人気の高いガーベラの販売は、毎年気温が高くな

る5～9月ぐらいまでは品質の問題で相場が苦戦します。今年は相次ぐ食品値上げなどで、切花への消費者の購買意欲が減退していたこともあり、夏場の相場はかなり落ち込みました。

この無花粉ガーベラは、契約した産地でしか栽培することができず、一般生産者にはまだ栽培する権利はありません。しかし、これを機に少しでも消費者の購買意欲がでてくれたら生産者として嬉しいです。私個人としては、通常の花粉の出るタイプでも、可愛い品種はたくさんあるので、是非皆様にもお勧めします！

8～9月は農繁期！

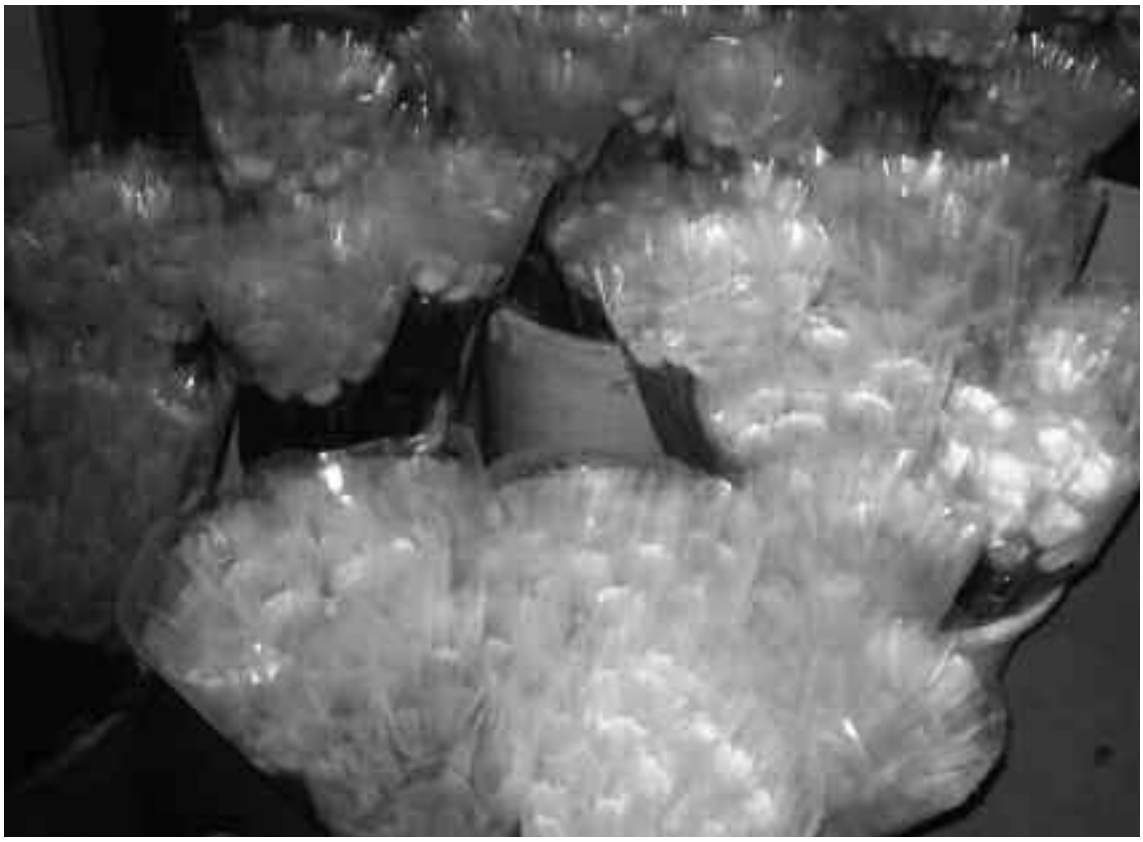
夏は盆、彼岸に小菊の出荷が最盛期となります。約15万本生産しています。加えて改植したガーベラも咲いてくるので、とても忙しい時期になります。両方とも私と父の二人で収穫しているので、体力的には現在の栽培面積で精一杯です。また、今年の春過ぎから祖父が介護を必要とする体になってしまいました。 そのため、家族の皆が眠れなくなったり、ストレスが溜まって体調を崩したりした時もありました。親戚やケアマネージャーと相談し、皆で前向きに対処した結果、祖父の体調も良くなり、今は週1回ヘルパーに来てもらい、入浴の介助をお願いする程度に回復しました。

母の代役、家事全般を今や私がしているので忙しい時期になると休む間もなく、イライラする回数も増えてきます（笑）。そんな私を学生の妹が何かと手伝ってくれるので、とても助かります。私たち姉妹を産んでくれた母に感謝です！

地域とのコミュニケーション

私の家は共選ではなく個選で出荷しているので生産者間のつながりが希薄になりがちです。若い切花後継者との研修会や先進地への視察などに参加し、大切な情報交換の場としています。

昨年の秋、“ちば花と緑の生産者紹介”にも参加しました。これは千葉県北東部の豊富な切花、鉢花、観葉、洋ラン、鉢植木の紹介展示や、管理方法などが見える商談会と産地見学会です。地元の生産者や全国から販



水揚げ中のガーベラ

売関係者がきます。恥ずかしい話ですが、普段、名刺交換などやったこともなく、大勢の前に立つこともありません。とても緊張しながらでしたが、多くの人の話を聞く事が出来ました。こういう花は出荷されても困るとか、品種の選定、規格、他の産地の話など、とても勉強になりました。その後、私の携帯も少しは鳴るようになりました。

箱詰めされた小菊

私の近くでは女性の農業後継者はいません。少し範囲を広げ、生産品目は異なりますが香取地域で野菜や養豚の女性後継者、農家に嫁いできたお嫁さんとの交流会や研修会にも参加しています。お互いの家を訪ねて“経営訪問”も行いました。他の農業や経営を知ることは勉強にもなり、私も頑張ろう！　という励みにもなります。また、同じ女性同士ということもあり、日頃の農家の暮らし方、子育てと仕事の両立、これからあんな風になりたい！　という夢など､とても話が盛り上がります。

今後の展望

まだ経営の主体は父です。父がいるという安心感や甘えもあり、経営についても大まかなことしかわかっていません。経費や数字に関して弱いので、これから少しずつ理解していく必要があります。その前にまず、ぽっかり空いてしまった栽培記録をまたつけていこうと思っています。その時頭に入っていても、毎年記憶が更新されます。記録をつける、別科の実習で最初に習ったことです。

生産品の質の向上、土壌改良、労働力のバランス等、理想の生産体制ではありません。試作で栽培してみたい品目もあります。しかし日々の仕事、家事、介護に追われ、現状を維持するのが精一杯です。

現在、重油をはじめ肥料、ダンボール等生産に関わるものが全て2～3割値上がっています。これは花卉生産農家だけではありません。どの農家も苦しくなっています。正直、このまま経営していけるのか、花つくりをやめて品目を変えた方が良いのだろうか、悩むこともあります。しかし、圃場にハウスがあるかぎり、何かを栽培しないといけません。

またこの先、私もパートナーをみつけ、いつの日か結婚、出産をする時が来ると思います。その時はまた状況に応じて栽培面積を減らすなど、無理のない経営をしていきたいと思っています。

まだまだ改善したいことはたくさんあり、決して余裕のある経営ではありません。けれども、人と人との繋がりを大切にしながら、世の中の流れや消費者のニーズに耳を傾け、切花生産に携わっていきたいです。

飯田久美子、現在27歳、仕事、家事、遊びに、頑張っています！　　…恋愛も！？

ガーベラと筆者

◘表紙解説

ポインセチア

（学名：*Euphorbia pulcherrima*）

横　井　政　人

この植物はメキシコ西部に野生する大型低木です。表紙の写真は1975年、中南米の探査に出かけた折、首都メキシコシティから700キロほど離れた太平洋沿岸のナヤリット州で撮影した野生ポインセチアです。赤い苞が出ているのですぐ分かります。

ここは海岸に近い所の静かな樹林地帯で、海抜200～500メートル、 北緯22度ぐらいの赤道に近い場所です。メキシコのサボテンの生える砂漠地帯とはまったく環境の違う穏やかな感じがする所でした。回りにはキバナコスモスやショウジョウソウが見られます。

ただポインセチアはこの辺やメキシコ全体のいたる所に生えているのではなく、この地帯の丘の傾斜地に点々と生えているだけでした。ただし文献にはグアテマラなど中米および南米にも分布するとあります。

メキシコは日本の5倍もある国なのでサボテン、ダリア、コスモスなどのこの国の特産植物でも簡単に見ることはむずかしいものです。ポインセチアもそうで、長く滞在しても他所では見られませんでした。

このような場所に生えている植物のためかポインセチアはアメリカやヨーロッパに紹介されるのが遅かったようです。欧米への紹介は植物好きなジョエル・ロバーツ・ポインセット氏が1825年にメキシコ駐米大使に着任されてからとのことです。

この野生ポインセチアは現在では栽培されていない苞が細く長いものです。私が園芸学部の学生のころには学部の温室に同じように高く伸びた細葉のポインセチアがありました。

現在栽培されている品種は1920年ごろからポール・エッケ氏によって育種されたものです。

写真が古く変色していて表紙写真にはまずいことは重々承知ですが、ポインセチアの野生を見るチャンスはなかなかないものなので、あえて表紙にすることにいたしました。

有毒植物ではないので土地の人は古くから医薬として使っていたようです。

Introduction and Horticultural Exploitation of Tropical America-native plants. 1-3号（千葉大学園芸学部）. Iizuka, M.,M.Yokoi,　M. Mii & J. Watanabeら. 1976, 1980, 1984.

植物分類表

幻の植物を追って

株式会社 アボック社

〒247-0056

TEL 0467-45-5119

http://www.aboc.co.jp/

注文方法

◘ 第19回　花葉会海外園芸事情調査団報告書

オーストラリア　タスマニア島　旅行記

小　泉　力

タスマニアはオーストラリア東南部メルボルン南方の島で、その東はニュージーランド、南は南極である。北海道よりやや小さい島で、タスマニア州として独立し、ホバートが州都である。オーストラリアでも特に自然が豊かで、有袋類のカモノハシ、タスマニアンデビル、ユーカリ類など固有の動植物が生息し、美しい自然が保存されていることで知られている。今回はタスマニアの植物とその自然環境を探索する旅である。

●第1日目　2008年10月14日(火)

成田空港を20：30出発、今回は鈴木司団長以下参加者15名と添乗員はおなじみの高橋美千子さん、旅行会社は近畿日本ツーリスト東京イベント・コンベンション支店である。

●第2日目　10月15日(水)

朝、中継地シドニーに到着し、午前中シドニー湾に望む公園を散策し、ユーカリやゴムノキ(*Ficus macrophylla*)の大木、日本では見ない宿根草や花にカメラを向ける。樹上にワライカワセミを発見、ここでもシャッターを。有名なオペラハウスの建物を見学し、昼食。このとき近くの公園で待望のジャカランダの花を見た。植込みにはオーストラリアらしくカンガルーポーが良く育っていた。

午後、空路でタスマニア島南端の都市ホバートへ向かう。空からタスマニアの森林の山火事の煙が見える。森林火災はこの地方の植物の独特の生態をつくった要因であることを後の見学で実感した。空港に到着し、待機していると麻薬犬かと思われる犬が荷物や人を嗅ぎまわっている。ガイドさんの説明ではタスマニアではフルーツ犬なのだそうで、外来の植物に対する厳しい国の環境保護の姿勢が窺われる。

シドニー　オペラハウスをバックに記念写真

夕方、ホテル・リッジス・ホバートに到着。ここでも植え込みの花木や宿根草の花にシャッター。

●第3日目　10月16日(木)

いよいよタスマニア植物探索の始まりである。今日から4日間、このツアーの解説をしてくれるのはリチャード(Richard Hale)さんと現地ガイドのみどり(Midori O'Brin)さんである。リチャードさんは自然保護や自然観察の専門家で、日本視察団は今回が初めてのようで、非常に熱心に説明してくれた。先ず最初に話したことは、この土地がネイティブであるアボリニジの人達のものであったこと、そしてヨーロッパ人がこの人達を滅ぼしてしまったという自責の念を語っていたのが印象的であった。

マウントウエリントン展望台よりホバート市街を望む

マウント・ウェリントン

最初の見学地マウント・ウェリントンに向かう。頂上(1270m)の展望台は眼下に広い河(内湾)を挟んだホバードの市街地や周囲の山々を見下ろす絶景地である。途中の森林地帯はstringybarkというユーカリ(*Eucalyptus obliqa*)で、過去の山火事で巨木の木肌は黒焦げである。森林限界を過ぎ、頂上付近は岩石とハイマツのような低

ユーカリの巨木

木の平坦地となる。岩の間に生える高山植物は強光、乾燥、風雪に耐えて米粒のような硬い葉、小花の特徴をもっている。眺望を楽しみ、写真を撮る。

下山の途中でもタスマニアの植物を手にとっての解説があり、皆写真やメモを熱心にしている。以後、車中も散策中も常にタスマニアの自然や植物解説が続けられた。

王立タスマニア植物園

河岸に沿った風光明媚な14haの植物園は中にチューリップの花壇、広々とした芝生、温室、各種樹木、花木見本園、南極植物展示用の冷房ハウス、ベジタブルガーデン、日本庭園など、非常に美しくよく整備されていた。特に温室はベージュ色の石作りに白い塗装の木造というクラシックで贅沢な建物である。シネラリア、シクラメン、シンビジウムなどに春の草花と観葉植物をゆったりと配置して美観に優れ、センスのよさに感心させられた。日本庭園は藤とサトザクラの関山が満開であった。見学後園内のレストランで昼食。

英国風の個人庭園

ハミルトンの個人庭園ではオーナーがヘレンさん、管理をカーリーさんがやっている庭園を見学。観光客が訪れるガーデンではないが公開されている。約40分。ここは広い牧場の中にある一軒家で、自分で楽しむためにこの家と庭と、たくさんの植物コレクションがある。ここでの話題の植物は一見サトザクラの御衣黄に似た緑の花？これは何だとよく見ればエルムの翼果の塊であった。入り口の白いライラック、青いケアノサスと黄緑色のユーフォルビア・カラシアスが真っ盛りであった。

マンスフィールド・ナショナルパーク

ここは巨木の森の中を川に沿って遡ると4段の美しい大滝に到るコース。なんといってもその巨大なユーカリが天高く林立している風景には圧倒された。思わずその根元に抱きついて巨大さを実感してみる。種類はジャイアント・アッシュ（*Eucalyptus regnans*）で樹高90mに達するという。川に沿って木性シダ（*Dickasonia antarctica*）の樹林が茂り、滝の近くではそのしぶきで特に旺盛な生育をしている。林下は倒木が自然に朽ち果て苔生し、清流にはカモノハシが生息しているという。夕刻迫る頃、巨木の森を後にし、市内に戻りレストランで夕食後ホテルへ。

木性シダの林

●第4日目　10月17日（金）

今日はホバートを発ち、北上して途中見学しながらローセンストンに向かうコース。この辺りの風景はなだらかな山が続き、何か日本の里山を想わせる地形である。

ポノロングワイルドパーク

朝9時開門と同時にボノロングワイルドパークに到着。ここはタスマニア固有の有袋類や鳥類を主とした飼育・保護をしている。ほとんど見たこともない動物ばかりでウォンバット、タスマニアンデビル、ワラビー（小型のカンガルー）、エチドナ（ハリモグラ）、パディメロン、ポッサムのほか島内固有種ではないがコアラ、カンガルーもいた。カンガルーの類は入り口で餌を貰って、手から食べさせる体験もした。

ここで認識を改めたのはタスマニアンデビルがとても可愛い動物であるということだった。夜行性で肉食有袋類としてデビルという名前をつけられ、歯をむき出した写真ばかりが喧伝されているが、実際は死んだ動物しか食べない生態系の中ではおとなしい掃除屋さんである。ここでの見学が、翌日のクレイドルマウンテンでの野生動物との

タスマニアンデビル

身近なふれあいでの予備知識になった。

次にロスという小さな町に着き、宮崎駿「魔女の宅急便」のモデルとなったといわれているパン屋に立ち寄り、キキの住んでいた屋根裏部屋を見学、特製のパンを購入し食べる。

更に北上を続ける。途中の風景はうねうねと続く牧場ばかりである。この辺りは、元はユーカリの森林地帯だった所だが、入植により開墾され、羊や肉牛(黒牛)の放牧地となった。所々に広がるナノハナの黄色が美しい。

国立ローズガーデン

昼過ぎ、ウールマーズの国立ローズガーデンに着く。ここのレストランで昼食をとり、バラ園の見学。広大なバラ園だがちょっと時期が早くて未開花株で残念。しかし、大して手入れもしていないのに生育はすこぶる良い。タスマニアに来て気がついたのだがどこでもバラの生育が良いのは、多分乾燥した土地のせいではないだろうか。バラ以外にもガーデンの樹木、草花は豊富で魅力的である。

今日の最終見学地、ローセンストン市街に程近いカタラクト渓谷見学。岩山を穿った渓谷は雄大で美しい。2人乗りのリフトで渓谷を遡る。谷全体が公園になっていてシャクナゲが大木となっているが、まだ咲き始めであった。そこから徒歩で戻る道々、植物の説明があった。谷の両岸の岩の間から林立している樹木はモクマオウばかりである。

市内レストランで夕食、グランドチャンセラー・ローンセストンに宿泊。

●第5日目　10月18日(土)

今日はローンセンストンから西へ100km、山岳地帯のクレイドルマウンテンに到るコースをたどる。この道も牧場が続く。途中マクラーバ鍾乳洞を見学する。石灰岩の露頭とカルスト台地が見え、近づいたことを知る。この洞窟は1936年に二人の少年によって発見され、当分の間二人の秘密にされていたという。それはここに棲息するツチボタル(土蛍)の幻想的な美しさを見てしまったからである。真っ暗な天井に星のような光に魅了される。

外に出てから、再び谷川に沿って下りながら植物探索。ここは木性シダの林で特にシダ類が多い。

クレイドルマウンテン

12時頃クレイドルマウンテンのロッジに着き昼食。建物は手作りで、板葺きの屋根がうれしい。昼食後ビジターセンター周辺の植物観察、許可証のワッペンを胸に貼って入山し、この森の主要な樹種ペンシルパインなどを観察。通路はしっかりした木道が整備され自然に対する配慮と来場者の安全性が行き届いている。1時間ほど観察し、待望の世界遺産クレイドルマウンテンに向かう。

20分ほどで湖畔に近い駐車場に着く。眼前の湖を隔てタスマニア随一の景観クレイドルマウンテンがその特異な山容を現し、息を呑む風景だ。一同記念写真を撮り、三々五々カメラを持って散る。湿地でコロコロと蛙の声が静寂の中に聞こえてくる。風景を堪能して、名残惜しいが近くの植物観察地に移動。

ここは、この地を最初に紹介したWeindofer氏の山小屋や記念碑がある丘の上である。この辺りにはアナナスに似た葉の*Richea pandanifolia*（2～3m）が目立った。ここでちょっとしたハプニング。熱心に植物の説明をしているリチャードさんは、1ヶ所に立ち止っていたのでヤマビルに取りつかれた。ヒルは千葉県の鴨川の山中で困っているものとよく似ている。みんなもびっくり、飛び去るやら靴下を払うやら。幸いだれも吸血されなかった。

夕刻、宿舎のボージャス・クレイドルマウンテン・ロッジに到着。池を目の前にしたロッジは高級な山小屋というたたずまいで、ベランダに出ると野性の有袋類が見られる自然の中だ。なお、今夜のディナーは今回懇切丁寧な案内、解説などのご配慮に対し感謝の気持ちをもってリチャードさん、みどりさん、運転手のティムさんを招き、鈴木団長よ

クレイドルマウンテン

リケアを説明中のリチャードさん、みどりさん

り記念品の贈呈もあって親しい雰囲気で盛り上がった。

夕食後、野生動物との出会いを期待してバスで再び暗闇の森の道を行く。赤色のライトを照らすと前述のウォンバットなどの幾種類かの有袋類が見えてきた。そのつど車を止めて観察、歓声が上がる。動物の行動は夜間に活発なようである。1時間余り見学してロッジに戻った。

●第6日目　10月19日(日)

クレイドルマウンテンからローンセストンに戻り、空路メルボルンへ。

早朝から出発までの数時間を自然観察にあてるべく各自散策コースを歩く。目的はまだ見ぬカモノハシを見たいからであったが、その好運を当てたのはMさん、Wさんの２人で、近くの川で泳いでいるところを見られたという。

10時にロッジを発ち、山岳地帯を下り、昨日のコースを戻る。出発して間もなくハリモグラを発見。車を止めてリチャードさんが捕まえて見せてくれた。丸くなって針を逆立てるので危険だが手慣れた手つきで抱え込んだ。みんな下車して観察、撮影。あとはそっと草原に戻してやった。

途中チーズ工場の売店に寄る。余り店もない場所での産地直売である。ここではワサビチーズが日本に紹介されて人気とか。試食や地元の生産物などを物色。

午後クレイドルマウンテンに戻り、観光船に乗ってタマリバーをクルーズ。17日に行った渓谷を船で遡るコースだ。両岸の丘に建つ住宅地は花と緑に囲まれて羨ましいような住環境である。

ローンセストン空港を17：30発ここでお世話になったリチャードさん、みどりさんに空港まで見送られ各自握手をして別れた。本当に良いガイドに恵まれた。メルボルンに18：35定刻通り到着。着後ホテルグランドハイアットメルボルンに宿泊。

●第7日目　10月20日

コモ(Como)ハウス

オーストラリア(ヴィクトリア州)のナショナルトラストのコモハウス、白亜の瀟洒な家だ。メルボルンで19世紀半ばに財を成した家族の家と室内の家具調度、美術品、生活用品の展示とガーデンが公開されている。ガーデンの樹木は歴史を経て大木となり、植物はボーダー花壇として植え込まれているが、かなり大型なものが多く、中でも目立ったものは世界最大と説明があった白い花のデージーで高さ2m位あった。そのほかシャクナゲ、エキューム、サトザクラの関山、アカンサス、原種タイプのクンシランのボーダーなどが開花していた。

国立シャクナゲ園

今回最後の視察地の国立シャクナゲ園である。メルボルン市郊外の高地にあり、ここもユーカリの巨木に囲まれた森林の一角に開かれたガーデンである。正式には「ナショナル　ロードデンドロン　ガーデン」となっており、大人10ドル80セントである。広い園内はマイクロバスが運行し(無料)運転手兼ガイドの女性が説明してくれる。植物はシャクナゲ、クルメツツジ、エクスバリーなどツツジ科を主体として、丁度今が最盛期で色彩の豊かさを誇っていた。このほかコニファー、マグノリア、ヤマモガシ科のテロペア、バンクシア、レウカデンドロン、セルリア、プロテアなど春の花木が盛りであった。

さよならパーティー

今回の最後の夕食会は日本レストラン「乾山」である。純日本食で畳と障子の部屋に日本人の店員で、日本に帰ったようである。堪能して店を出る頃には満員の盛況で、お客はヨーロッパ系の人が多く、日本食という文化がこれほどに世界に広がっているのかと改めて感じた。

明日の出立に備えて荷物の整理に忙しい。

●第8日目　10月21日(火)

早朝にホテルを発ちメルボルン空港に着く。9：25発で中継地ケアンズに向かう。

ケアンズ発13：25にて成田に向かって出発、20：00に無事到着。

全期間良い天候に恵まれ、無事帰国できた。植物も堪能し、とてもよい旅行であった。

鈴木団長はじめ関係者に感謝申し上げます。

☆第25回　2008年花葉サマーセミナー報告

花卉産業を環境創造ビジネスに
～環境の世紀の論理武装と展望～

花葉会幹事　久　保　田　芳　久

今年の花葉サマーセミナーは、御茶ノ水駅近くの、(財)全電通労働会館　全電通ホールで、7月12日(土)～13日(日)に開かれました。湯島聖堂や有名大学、神田本屋街に近く、学びの場として落ち着きのある、町並みの中にあります。交通もJR、地下鉄と便が良く、この会にふさわしい会場になりました。

「環境の世紀」と言われながら、様々な産業分野で「環境」が打ち出され、消費活性に使われながら、我々花卉産業がそこをうまく使えていません。環境にいいものを生産し、取り扱っていながら。今回のテーマ設定はそこにありました。

ただ、環境と言うと、あまりにも幅が広く、全て取り上げがたく、かつ目的を絞る必要があり、苦心して講師陣を多岐にわたり、要請した次第です。よって参加者にご理解しやすくと考え、セミナーの始まりと終わりで、安藤会長に話をしていただきました。

●7月12日(土)

開講にあたって

花葉会会長　千葉大学　安藤　敏夫

世の中の環境に対する取り組みと、この花卉業界の置かれている立場を解析し、二日間の各講師の話から何を聞き取ればいいかを解説しました。そこから開けてくる「環境の世紀の花産業」の目標と活路を見つけるべく、今回のセミナーの意義が展開されました。

感性価値の時代の花卉産業

桐蔭横浜大学特任教授　中部大学・応用生物学部教授

東京農業大学客員教授　涌井　史郎(雅之) 氏

花卉産業と環境との定義づけを涌井先生にお願いし、この表題で講演をお願いしました。テレビ番組でも見事な論説を展開しておられますが、このテーマにも、格調高い話をしていただきました。

涌井先生のランドスケープ・アーキテクトとしての立場から始めて、今、地球が抱える問題に展開し、チャド湖の縮小など具体例を挙げます。認識すべき大きな問題を構成してから、人間像に発展します。「農業革命」「産業革命」を成した人類は20世紀、文明的人間像を余りにも膨らませてしまった。幸福＝物的要求分の物的充足度として環境に対する負荷を強めてしまった。そればかりか、命という最も基本的な生物としての生存条件を支える仕組みすら壊れ始めたとし、生物的、精神的人間像を訴えました。

LOHAS、最近目にする言葉です。健康・環境などを重視した繋がりを大切にした生き方と解釈します。マーケッティング論でその「新生活創造者集団」の存在を社会現象として紹介し、新たな市場形成を説きます。そこには、知性より感性と説き、そうした生活に相応しいのは「花や緑」と導きます。

市場創造の話に発展します。花文化への着目とし、神や仏の供物、万葉集の植物種の多さ、「花鳥風月」「風姿花伝」「花壇地錦抄」「日本庭園の借景」などを挙

げます。「環境革命」として新たな世界的な動きを捉え、COP10にも関る涌井先生の展開がなされます。

最後に、「市場を発見し、創造する」として、需要の喚起と、科学的な市場規模想定、ブランド管理の徹底を述べ、「Customer Solution」「Customer Cost」「Convenience」「Communication」の新たな4Cを挙げます。そして「感性価値」が決定要因とし、花卉産業の環境市場開発を訴えました。

生活環境における植物の効用

東京大学大学院農学生命科学研究科　農学研究委員
生命耕学会理事　**浦野　豊** 氏

世界中を旅し、環境の世界を見詰めて来た浦野博士は、訴えたいことが多くあり、このテーマを講演するにあたり、チョット時間が足りなかったようです。大事なテキスト最終部分について、レポートします。

物質循環における植物の役割は、重要ですが、光合成にからんで4つの工場があります。A発電所、Bエネルギー工場、Cでんぷん工場、Dアミノ酸工場です。それは食料、木材、繊維などの「生産」です。さらにこの工場がなす働きに「環境改善」が加わります。これをファイトレメディエーション(phytoremediation)と言います。Phyto=植物、remediation=修復、治療、矯正つまり植物による(環境)修復です。

このファイトレメディエーションの基本機能は、①化学物質の吸収、②重金属等有毒物質の濃縮機能、③蒸散作用によるうち水効果や雨水の土壌浸透防止機能、④化学物質を分解する根圏微生物の活性機能です。これら4つの機能は、以下の基本機能の組み合わせにより実現します。ⓐ植物による吸収除去、ⓑ植物根による濾過除去、ⓒ植物による固定化、ⓓ植物による気化除去です。大気汚染物質浄化機能で一般的には二酸化チッソ、アンモニア、オゾン、二酸化硫黄、PAN(光化学スモッグの成分)、ホルムアルデヒド、アセトアルデヒドなどがあります。

特に二酸化チッソ、オゾン、二酸化硫黄、PAN、ホルムアルデヒドは気孔を介して葉内に取り込まれ、迅速に他の物質に変換されます。先の4つの工場により植物自身の栄養源として使われます。

植物の心理的効果を定量する

愛媛大学農学部　教授　**仁科　弘重** 氏

仁科先生は、植物の癒し効果を脳波測定により数値化している方です。そのユニークな研究成果を披露していただきました。

心身ともに落ち着いた状態で出現するα波、緊張・興奮時に出現するβ波を使い、α/β値の大きいほど快適性と捉えます。実際に鉢植えを栽培してもらって、その過程での脳波の変化、それを第三者が傷つけての変化などを測定しました。これらで分かってきたことは、生長して変化のあるもの、柱サボテンのように動かないもの、栽培途中で枯れたシクラメンなどで面白い結果が出ました。

植物を育てることが人間の心理に及ぼす影響の大きさは植物の好き嫌いや、植物の種類によって異なることが明らかになりました。また高齢者と若者で、種類による影響は高齢者より若者で大きく、植物が育つことの影響も若者で大きく、高齢者では安定していたという結果でした。

オフィスの観葉植物配置の影響も調査されました。実際の働くオフィスが使われました。この実験から、オフィスワーカーにとって、配置する植物は、自席から出来るだけ近い距離にあったほうが効果的で、植物の選択や世話などワーカー自身が主体となる植物への関わりが、心理に変化を与えることが明らかになりました。また、オフィスへの植物導入が、ワーカーの職場におけ

るストレスの緩和につながり、空間の快適性を向上させる効果があることが分かりました。

総合討論の後、会場をホテル東京ガーデンパレスに移し、懇親会が行われました。

●7月13日(日)

環境ビジネスの先行例に学ぶ

―屋上・壁面緑化業界はどうして成功したか―

明治大学農学部　教授　輿水　肇 氏

屋上緑化は、ヒートアイランドで悩む都会の義務として、定着、発展してきました。環境産業として早くに成功した実例です。そこには数値化や、地道な活動など様々な苦労があったはずです。それを披露いただき、花卉産業が環境産業となるための指標を聞こうと依頼しました。

屋上緑化という文化は1960年代のデパートの屋上などに始まります。アメリカの大規模庭園、ヨーロッパの草屋根型などが画像で紹介されました。また屋上ビオトープなど教育の場にも入り、ヒートアイランド化に対するこれらの効果が多くの数字で示されてきました。

屋上に設置するためには、重量の問題が大きく、軽量、薄層、耐根＋排水兼用資材、省メンテナンス、底面吸水、ユニット化、リサイクル資材の利用が開発されました。また関連資材として舗装材、嵩上げ材、照明、池、流れ、噴水、装飾品などが新たに開発されました。そしてもっとも大切な植物材料の探索です。

屋上緑化は、建築と緑化(造園、園芸)の協働作業です。これに「制度化」が重要な鍵となっています。「良いことは分かるが、実行するにはいま一つメリットが」であったはずです。ここに都市緑地法、緑化率条例制度、緑化施設整備計画認定制度、市民緑地制度、エコビル整備事業など、行政からの強い応援がありました。屋上緑化は「義務」であり、納税面でのメリットも付加されたのです。

この制度制定に大いに関ってきた中心人物が輿水先生自身であることを安藤会長から紹介がありました。

環境ラベルをどのように経営に活かしたらよいか?

―MPSとエコファーマーを取得して―

福島県大沼郡昭和村・昭和花き研究会会長　菅家　博昭 氏

菅家さんは、2度目のサマーセミナー講師、今回のテーマは、環境認証です。MPSとエコファーマーの両方を取得されて経営に生かしており、それで講師をお願いした次第です。

用意されたテキストの資料はかなりの分量です。持ち時間1時間では、消化し切れません。雪国での生き方がじっくり説明されました。それは「自然と一体となった」生き方とその農業です。

葉タバコから宿根カスミソウに転換したいきさつと、その雪国での栽培体系が画像で紹介されました。2mを越す積雪は、パイプハウスの毎年の解体と設置を繰り返す作業になります。でもその雪は、肥料の蓄積を防ぎ、積雪の中の株越しは農薬削減につながり、その雪を貯めて冷房する施設もできています。エコなのです。身の回りにある樹木、草の葉など自然に還るものを用い、様々な現場での利用を説明します。その中での生産物と、その商品に対するマーケットの評価の低さも提示しました。菅家さんは別に書物「会津学」を3巻まとめています。

「環境認証を取り、実践するのは当たり前のこと」とし、その品物を受け取る側にも責任を問う、雪国からの哲学を聞いた講演でした。

鉢物生産から見たMPS　―その効果と課題―

有限会社セントラルローズ　代表取締役社長　大西　隆 氏

岐阜県で大規模にバラの鉢植えを生産する大西さんは、MPS制度の存在を早くから知り、その日本への導

会場ロビーを飾る「わが社の推奨品種」。朝の飾り付け風景

入プロジェクトチームに加わり、さらに自らが初の申請者となった人です。その大西さんにこの認証制度の生産側から見た意見を述べていただきたくお招きしました。

この制度の優れている点として、大西さんは生産、流通、販売それぞれが同じ制度を利用できることを挙げます。食用農産物等で取り組みが進んでいる他の認証制度は生産側が主体的に取り組む仕組みであるため、流通、販売の要望や事情と一致しない場合が多い。よって消費者の認知も進まず、労は多いが生産者が思い描いたようになっていないのではないかと訴えます。

MPSでは、毎年、栽培データを送信し、オランダの本部で審査されます。データ送信にあたり、今まで以上にエネルギー対策を徹底しました。折しも燃料高騰もあって。内張りの利用や、保温性の高い資材の活用、ヒートポンプ等の導入の検討など、設備の再検討も進めています。露地ベンチの活用も作型や品種の変更も組み入れて。化学農薬には、防虫ネットの徹底、見回りの徹底による早期発見で、効果的に農薬を使う。耐病性品種の導入などです。さらには事務室、応接室、会議室、休息室、トイレなど職務環境の整備、ごみの分別などに及びます。

最近では食卓に花を置かない家庭もあり、肥料や農薬など栽培方法に対する不信感が一因ではないかと見ます。「消費者と環境」を無視した花き産業に発展は無さそうであると結びました。

花卉生産における生物農薬技術の可能性
―エコファーマー認証獲得にむけた栽培技術の確立のために―

埼玉県農林総合研究センター副所長　根本　久 氏

IPM(総合的有害生物管理) を確立した研究者である根本氏は、本当に現場に詳しい方で、この日の講演も、徹底した具体論、現場論でした。

先の中国製有毒餃子事件のメタミドホスは、アセテートオルトランの分解物であり、農家が普段使っているものです。プリクトランは殺ダニ剤であり、流産、奇形が出やすく禁止になりましたが、使われて後から分ったのです。多くの産地で使われていました。農家が危険だったのです。

種の多様性で見るとハウスは乏しく、害虫のわずかな量で問題であり、外敵が居ないので生育も早いので

す。コナジラミ類、スリップス類、タバコガ類など、農薬を使っている所で、生育量が多いと言う特性があります。皆殺しタイプ農薬を掛けるとこれらはかえって増殖します。天敵が居なくなるのです。様々な事例が紹介されました。

薬剤の抵抗性遺伝子を持った個体が散布後増殖し、農薬が効かなくなる例を、夢の島のハエなど、様々に列挙しました。早くから生物農薬を使っているオランダと、農薬に頼るスペインとEU統合で野菜の売り上げで差が付きます。

IPMとは、複数の防除手段を組み合わせることです。植物の感受性、害虫が居るか、その環境。この一つでも無ければ予防になります。「施設に病害虫を入れない、増やさない、出さない」。健全な苗、強い品種。ハウス周りの整備、天敵に害の無い農薬を使う、バンカークロップ法、様々な天敵、防除微生物、それらに適した温度・湿度、具体的ヨーロッパ事例、草抑えシート、粘着テープ、光反射マルチなどの上手な使い方、ボリジとワタアブラムシとアブラバチの組み合わせ、等など何れも興味深い話題の列挙です。

重要な心がけとして、一作が終わったとき、残った作物も全て処理してから処分するヨーロッパの心がけ。冬死ぬ虫も農業環境では生き残り、一年中います。生き残りサイクルを切ることです。

単なる防除の紹介でない、あらゆる面から科学された総合的取り組みの考え方は、今回のテーマにも沿った哲学であり、圧倒される密度でした。

総括

花葉会会長　安藤敏夫

涌井先生には高度なところから分析を頂き、私たちが扱ってきた植物は意義があったというお墨付きを頂きました。国が定めた環境認証のエコファーマーは認証基準が不明確で、カスミは取れましたが、他の花は不明瞭です。第三者が認証する仕組みが無い。MPSは第三者が居り、監査が入ります。認証ビジネスとの付き合い方は難しく、今まで日本に無いシステムです。今までに無いビジネスを作る道具として生かすのか？　身を清めるための道具とするなら皆ついてこれるのでしょう。自分たちは環境ビジネスをやって来たのです。環境は自分のこととして生かして行ってください。

◎テキスト購入ご希望の方は、代金2000円（送料込）を添えて、下記へお申し込みください。
〒271-8510　松戸市松戸648
千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内「花葉会」事務局
℡:047-308-8810　郵貯銀行振替：東京5ー1334花葉会

会場風景。熱心に質問する受講者

1日目総合討論。右から浦野、仁科両講師、
安藤会長、司会の山下幹事

サクラ最前線

千葉大学園芸学研究科　花卉園芸学研究室　博士前期課程2年
上　村　文　武

里で生まれた‘ソメイヨシノ’

ここ数年の花卉研の学生がどのような研究を行っているのかは、あまり知られていないのではないでしょうか。そこで一例として、私が行っている‘ソメイヨシノ’の起源に関する研究をご紹介します。

最もポピュラーなサクラ品種‘ソメイヨシノ’の起源に関しては論争が続いています。江戸時代に染井村の植木屋が作出、エドヒガンとオオシマザクラの雑種という説が一般的ですが、他にも雑種起源ではなく独立した種であるという説もあります。ただし近年のDNA鑑定の結果は全て「エドヒガン×オオシマザクラ」となっています。特に注目すべきは「‘コマツオトメ’のようなエドヒガン系品種を母親に、オオシマザクラを父親として起源した」という園芸学部の中村郁郎准教授ら(2007)の報告です。もしこれが本当ならば「‘ソメイヨシノ’は山ではなく、里で誕生した」ということになります。里のエドヒガン系品種を母親とするならば、同じく里のサクラが父親のはずです。ですから、里にあるサクラを調査すれば、‘ソメイヨシノ’の両親を絞り込める可能性がでてきたのです。

鑑定ツールの開発とS遺伝子

私の研究は‘ソメイヨシノ’の起源に関してですが、具体的には里にある‘ソメイヨシノ’の親や直接の子孫を鑑定するツールの開発と、応用です。花の研究にもDNA鑑定が使える時代になりましたが、解析できる遺伝子は多数あり、それら全てを調べるのは現実的に不可能です。そのため、調べ勝手のよい遺伝子を選び、解析することになります。となれば、この遺伝子の選択が実験の成果を決めるともいえます。私の場合、安藤教授のひらめきで、多くのメリットを持っていた自家不和合性遺伝子(S遺伝子)を選択しました。自家不和合性とは植物が自他の花粉を認識し、自分の花粉では受精しない性質です。つまりS遺伝子は花粉認識に関わり、同じ遺伝子座内の対立遺伝子間の変異が多岐にわたり、さらに自然界では必ずヘテロで存在します。 また、サクラ属はモモ、アーモンドなどの果樹を含み、これらのS遺伝子の情報は既に蓄積されています。このように、気がつけば当たり前のようなことですが、S遺伝子はサクラの系譜を辿るのに絶好の遺伝子だったのです。

系譜鑑定ツールの利用法

それでは、実際のS遺伝子利用法を説明します。DNA鑑定の最大の特徴は、ある2個体が同じ遺伝子を持っていても、必ずしも親子の関係にあるとは言えませんが、同じ遺伝子を持たないならば、「親子の関係にない」と断言できる点にあります。つまり、‘ソメイヨシノ’と他のサクラを比較し、同じS遺伝子を持たないサクラは交配親、直接の子孫の候補から外すことができます。この性質により、里のサクラをふるいにかけるのです。

まず、園芸学部の‘ソメイヨシノ’の花柱を5000本(10g)集め、これからRNAを抽出し、S遺伝子の塩基配列を決め、DNAマーカー(ふるい)を2つ設計しました。1つ目はS遺伝子に共通の配列を使い、できるだけ多くのサクラに応用できるように設計しました。この段階で‘ソメイヨシノ’と異なるものをふるい落とします。残ったサクラは、2つ目のマーカーで調べます。これは‘ソメイヨシノ’に特有な配列で設計されています。増幅が確認できた個体はさらに塩基配列を調べます。

こうして開発した‘ソメイヨシノ’の系譜鑑定ツールを使い、里で栽培されているサクラを調査していくことが私の今後の研究課題となります。また、この鑑定ツールはサクラと同じ型の自家不和合性を示す植物(バラ科やナス科など)に適用でき、幅広く利用されることを期待しています。

実験に用いた園芸学部圃場の‘ソメイヨシノ’と花卉研メンバー

人生花色・花組の色

千葉大学園芸別科　花卉専攻2年
菅　原　弘　行

現在、私は園芸別科花卉専攻（通称花組）に所属している。花組という名を聞くと可愛いイメージがあるが、決して生易しいものではない。渡辺均先生の指導のもと、花のプロフェッショナルを目指すべく、植物の初歩的な知識から高度な栽培技術までを幅広く勉強する。

入学して間もない頃に、先生が私たちに言った言葉がある。「園芸別科を卒業する2年間の間で、君たちには花のプロフェッショナルを目指してもらいたい。」当時の私には、この言葉にまるで興味がなかった。

私は農業高校を卒業して、千葉大学園芸学部園芸別科に入学。実家がバラとキクを栽培している切花農家の長男に生まれた私には、生まれた時から花があった。幼い頃は、多少なりとも花に興味をもっていた。しかし、自分が成長するにつれて、その感情もしだいに薄れていった。それは自分の将来が決まっていて、決められたレールの上から逃げたいという感情があったからではないだろうか。今思えば、その逃げたいという感情がきっかけで地元を離れ、そして花組に巡り会えたのかもしれない。

花組に入って最初にやらなければいけない仕事は灌水である。松戸キャンパスには、ビニールハウスが2棟、熱帯植物やラン類を管理する温室が1棟、計3棟の花組専用ハウスがある。これらのハウスの植物を花組全員がローテーションを組み、当番制で管理する。切花農家に育った私は鉢花に触れたことがなく、灌水などもってのほかであった。その灌水で、自分にとって一生後悔するような出来事が起こった。

夏のような暑さになった春の日、自分が灌水当番というのを忘れてしまい、ハウス内の植物をほとんど枯らしてしまった。その時、自分の無力さと、植物に対する想いの無さを激しく痛感した。そして植物も人間と同じく、生きていることを知った。その日を境に、自分が興味を持たなかった植物を意識して観察するようになり、自分の意思で植物を知ろうと思った。そこで初めて真面目に勉強しようと思ったのが、花葉会主催花産業必修1000属検定だ。1000属検定を勉強していくと、植物の広大な世界を目の当たりにすることとなる。以前は、実家で栽培しているバラとキク、高校で栽培したシクラメンやベゴニアぐらいしか植物の名前は知らなかった。もちろん、植物の学名など知るはずもなかった。そんな植物知らずの私だったが、最近はようやく植物の世界のスタートラインが見えてきた気がする。

花組の最大のイベントといえば、戸定祭での花販売である。11月に行われる戸定祭に向けて花組全体で協力し合い、先生や苗生産部の技官の皆さんのアドバイスを得て植物を栽培し、それを販売する。自分達の実力が評価される重大なイベントでもある。戸定祭が終わると、2年生には必修科目である修了論文がある。私はバラを研究テーマにしているのだが、まさに悪戦苦闘。2年間という短い期間での研究なので、失敗すると後戻りはできない。皆、必死になって取り組んでいる。

花組の2年間はあっという間で、先生が私たちに言った「花のプロフェッショナル」になれるかどうかはまだ不安である。しかしながら、花組で過した2年間は一生の宝物だと思う。花を自分から好きになることができ、そして大切な仲間ができた。花組で過ごす2年間はまさに、人生花色・花組の色である。

‘さくらさくら’と花組

花葉会総会

10月5日(日)午後2時より、平成19年度花葉会総会が東京・芝パークホテルにて開催されました。出席者45名、宮田増美幹事の司会進行で定刻通り開始。

安藤敏夫会長より開会の挨拶と大学の近況報告がありました。「来年、園芸学部は100周年を迎えますが、松戸キャンパスの西千葉への移転問題が起きています。12月には返答することになっていますが、まだ結論はでていません。なお、園芸別科は昨年度定員割れとなり存続の議論が起きています。存続させたいと思っておりますので、受験生の確保にご協力をお願いします。また、農場の売上は4700万円（今までは2000万円）、農場で使うことができるので、技官２名、助教１名を雇用できるようになりました」と、松原紀嘉助教（博平20）が紹介されました。

午前中に開催された幹事会で推薦を受けた長岡求幹事長が議長に指名され、議事に入りました。

平成19年度事業報告

① ７月７・８日
　第24回花葉サマーセミナー
② 10月７日　総会
③ 花葉会賞の贈呈
　19年度の受賞者は萩原純一氏（昭29園卒）であった。
④ ６月29日４日第第17回海外園芸事情調査「ドロミテアルプスとフイレンツエ・ピストイア植木の村視察」
⑤ 12月10日「花葉」26号発行
⑥ 花産業必修1000属検定
⑦ 幹事会の開催は、平成19年４月21日、６月９日、７月８日、８月18日、10月７日、12月15日、平成20年２月２日、３月22日の８回。

平成19年度会計報告

収入の部

前年度繰越金	1,589,984
会報広告料(26号)	1,174,790
ｻﾏｰｾﾐﾅｰﾃｷｽﾄ売上	48,000
書籍売り上げ	13,000
卸用カタログ売上	67,500
協力金	256,430
セミナー収入	94,630
基金より繰入	
(100周年記念事業寄付)	500,000
基金より繰入	
(次年度セミナー会場費)	601,650
雑収入	90,461
預金利息	2,155
合　計	4,418,600円

支出の部

印刷費	34,125
会報関係	1,365,840
通信費	86,580
運送費	4,810
記念品代	44,100
会議費	299,105
事務費	452,604
賃金	521,310
慶弔費	0
税金	70,000
100周年記念事業寄付	500,000
次年度分セミナー会場費	601,650
雑費	100,000
合 計	4,080,124円
差引残高	338,476円

第24回
2007年サマーセミナー会計報告

平成19 年７月７・８日　日本歯科大学富士見ホールにて開催。
参加者数323名（うち幹事、講師、記者、発表者、学生等94名）

収　入

受講料		
@30,000 × 167名		5,010,000
その他割引 57名		1,432,000
合 計	224名	6,442,000円

支　出

会場費	3,074,855
印刷費	762,850
講師謝礼	550,000
講師旅費宿泊費	1,075,205
通信費	198,410
運送費	51,470
事務費	292,358
会議費	300,000
税金	22,222
雑費	20,000
合　計	6,347,370円
差　引	94,630円

平成19年度会計監査報告

監事の河野寛司氏より、「平成19年度の会計収支の監査の結果、事務処理および諸帳簿の記載は正確かつ適正に行われていたことを報告します」と、報告がありました。

平成20年度事業計画案

①第25回2008年
　花葉サマーセミナー開催
　平成20年7月12･13日(土･日)
　全電通労働会館　全電通ホール
　懇親会会場　ホテル東京ガーデンパレス
②花葉会賞の贈呈
③第18回海外園芸事情調査平成20年10月14日～10月21日「タスマニアとメルボルンの旅
④「花葉」27号　発行
⑤花産業必修1000属検定

平成20年度予算案

収入の部

前年度繰越	338,476
会報広告料	1,200,00
テキスト売上	50,000
その他の収入	800,000
基金より繰入	719,524
預金利息	2,000
合 計	3,110,000円

支出の部

印刷費	100,000
会報関係	1,400,000
通信費	85,000
運送費	5,000
記念品代	50,000
会議費	300,000
事務費	450,000
賃金	500,000
慶弔費	50,000
税金	70,000
雑費	100,000
合 計	3,110,000円

基金報告

前年度残高	27,871,453
きょ金	0
定期利息	51,572
普通利息	3,038
園芸学部創立100周年記念事業寄付	△500,000
次年度セミナー会場費	△500,000
合 計	26824413円

（平成20年３月31日現在）

「基金に手をつけ、赤字予算を組まざるをえないのが現状ですが、幹事会として何らかの解決策をとりたいと考えています」と、長岡幹事長より補足説明がありました。

報告

幹事交代について

新幹事：猪熊　雅雄氏
野本　寿久氏
松原　紀嘉氏

退　任：籾山　秀之氏
濱田　　豊氏
羽毛田　智明氏
遊川　知久氏
竹下　大学氏
河合　伸志氏

以上の幹事交替、ならびに、会計監査の遠藤宗男氏ご逝去に伴い、新会計監査に村川文彦氏に決定したことを、安藤会長より報告がありました。

花産業必修1000属検定について

花卉産業には「非常に多くの種類を扱う」という特徴があります。この検定はどの花の名前から順に覚えていけばよいかのガイドラインを提供するものです。1986年9月1日から毎月1回以上実施、現在までに、

Ｃ級ライセンス保持者　224人
Ｂ級ライセンス保持者　 73人
Ａ級ライセンス保持者　 24人

を輩出していることを、安藤会長より報告がありました。

なお、それぞれの議題は、拍手をもって承認されました。

花葉会賞贈呈

総会に引き続いて、花葉会賞の贈呈がありました。長岡求幹事長より、丹後英彦氏（昭34卒）、村川文彦氏（昭35年卒）、木崎信男氏（昭36年卒）の3名を紹介。安藤会長より賞状と記念品が授与されました。

花産業必修1000属検定試験
Ａ級、Ｂ級合格者認定証授与

卒業式で行われていましたが、今回より、総会の会場で行うことになりました。

以下の5名に安藤会長より、認定証が授与されました。

Ａ級　橋田紘和、佐藤裕之
Ｂ級　上村文武、佐々木秀典、松永整治

花葉会賞受賞記念講演

村川文彦氏より、講演が行われました。

懇親会

午後4時より、武内嘉一郎・田旗裕也両幹事の司会進行で、懇親会が始まりました。乾杯の発声を、真家幸雄氏が行いました。途中、新幹事の紹介、渡辺重吉郎氏、鶴島久男氏、鳥居恒夫氏等の近況報告。またトキタ種苗の秋山泰男氏のビオラ‘シャングリラ・ブルーアンドパープル’ＡＡＳ入賞を紹介。終始和やかな雰囲気で進行しました。

（文責：編集部）

会場で花産業必修1000属検定験Ａ級、Ｂ級合格者認定証を受けたメンバー。
左から上村文武、松永整治、佐藤裕之、橋田紘和、佐々木秀典

花葉会会則（2007/10/７）

〈名　称〉

第一条　この会は「花葉会」という。

〈事務局〉

第二条　この会の事務局を千葉大学園芸学部生物生産科学科花卉園芸学研究室内におく。

〈会　員〉

第三条　本会の会員は、千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室並びに附属農場花卉部に在席した者、及び戸定会会員で現在花卉関連業務に携わる者、

(2) 内地留学生、研究生、聴講生、その他本会の主旨に賛同し、総会の承認を得て所定の手続きを終えた者とする。

〈目　的〉

第四条　この会は会員相互の親睦、研さんと情報交換を図ると共に、花卉園芸界の発展に寄与することを目的とする。

〈事　業〉

第五条　この会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

①総会　②親睦会　③研究会　④会報、名簿等の発行　⑤功労者の表彰　⑥その他、前条の目的を達成するために必要な事業。

〈役員等〉

第六条　この会に次の役員をおく。

① 会長 1名　②副会長 若干名　③幹事長1名　④副幹事長 3名　⑤年次代表幹事　若干名　⑥幹事50名以内　⑦会計監査２名

(2) この会に名誉会長をおくことができる。

(3) この会に顧問、相談役を若干名おくことができる。

〈役員等の選出と役目〉

第七条　会長は総会の総意により推戴し、会務を総括し、会を代表する。

(2)副会長は総会の総意により推戴し、会長を補佐し、会務を処理する。

(3)幹事長は幹事の互選により選任し、幹事会を主催し、会を代表して会務を処理する。

(4)副幹事長は幹事の互選により選任し、幹事長を補佐し、会務を処理する。

(5)年次代表幹事は幹事の互選により選任し、世代の意見を集約し、会の運営に寄与する。

(6)幹事は会員の中から互選する。

(7)幹事は幹事会を組織し、議事を審議決定し、会の事業を執行する。

(8)会計監査は会員の推薦により会長が選任する。

(9)会計監査は会の会計を監査する。

(10)名誉会長は会員の中から総会において推戴する。

(11)顧問、相談役は会員の中から幹事会の協議を経て会長が委嘱する。

〈役員の任期〉

第八条　役員の任期は２年とし、再選を妨げない。

〈会　計〉

第九条　この会の経費は会費、寄付金、収益金をもってあてる。

(2)本会の収支予算及び決算は幹事会の議決と会長の承認により定められ、決算は会計監査の監査を受けなければならない。

(3)会計年度は毎年４月１日より翌年３月３１日までとする。

(4)会費は必要に応じ幹事会の議決と会長の承認により徴収する。

〈会　議〉

第十条　総会は年１回とし、会長が召集する。

(2) 幹事会は必要に応じ、会長が召集し、会務事項について審議する。

(3)総会の議事は出席会員の2/3以上の賛成がなければ議決できない。

〈会則の変更〉

第十一条　この会則は総会の議決を得なければ変更できない。

〈その他〉

この会の細則については、幹事会にはかり、会長が決定する。

〈附　則〉

この会則は昭和56年9月6日から実施する。

この会則は平成9年10月26日から実施する。

この会則は平成10年10月17日から実施する。

この会則は平成13年９月29日から実施する。

この会則は、平成15年９月27日より施行する。

この会則は、平成16年10月１日より施行する。

花葉会　役員（2008/10/5）

顧　問： 小杉　清

相談役： 岩井英明、魚躬詔一、小田善一郎、鶴島久男

会計監査： 河野幹司、村川文彦

名誉会長： 横井政人

会　長： 安藤敏夫

副会長： 國分　尚、渡辺　均

幹事長： 長岡　求

副幹事長： 田中桃三、望田明利、武内嘉一郎

年次代表幹事： 田中桃三、望田明利、武内嘉一郎、小笠原誓、渡辺　均（年次順）

企画編集幹事： 石川君子、小泉　力、鈴木　司、田旗裕也、松原紀嘉、宮田増美、村井千里、山口まり、山田幸子

庶務会計幹事： 上田善弘、小沢　勇、西原彩子、野本寿久、福永哲也

事業基金募集幹事： 秋山泰男、熱田　健、猪熊雅雄、大林修一、小笠原誓、小黒　晃、久保田芳久、齋藤俊一、荘　智裕、鈴木邦彦、富山昌克、山下容子

（五十音順）

◘ 花葉会賞受賞者紹介

米どころで花作りに励む丹後英彦氏

小　澤　勇

丹後英彦氏の略歴

昭和11年9月11日	新潟県北蒲原郡中条町（現胎内市本郷町）に生まれる
34年3月	千葉大学園芸学部卒業
35年	中条町役場勤務
42年	中条町役場退職 自営
43年	丹後花園設立
平成元年	中条町農協組合長就任
10年	同　退任

広大な緑の稲作の地で、30歳で町役場を退職し、念願の草花栽培を始めた。シクラメンを主に、草花を相手にした。まだ販売ルートがなく、車で小売りをし、頑張られた。

5年後、新しい花木の分野としてシャクナゲに目を向け、その苗作りに転換していった。旧来の産地は情報も苗も一切外部に出しておらず、新規参入者は種子や親木のたぐいは野外採種の海外からのものに頼らざるを得ない状態であった。だが、参入グループ内では情報や各自が経験した技術を公開しあって向上に努め、みんなの力で生産拡大にもっていけたという。

その後シャクナゲ品種を大きく盛り上げた‘ルーズベルト’も入ってきた。門外不出であった接木技術が少しずつ普及し始めていった。またその後、イギリスでのヤクシマ交配種を知り、年々導入、接木による増殖に励みをつけていったようである。外国からのものは挿し木によるもので、2～3年で根腐れして枯れてしまった。後に開発された台湾シャクナゲの強健種（耐暑性）である赤系シャクナゲが台木として用いるようになり、夏枯れの心配は回避され、蕾つきのシャクナゲ生産が急速に増加。花の万博の頃にはシャクナゲブームといわれるほど盛んになっていた。

シャクナゲの世界状況や新品種など、諸事情を同級の原田氏、先輩の平野氏にご指導をいただき、同窓を通じての人とのつながりのありがたさを大きく感じておられる。

シャクナゲのおかげでイギリス、ドイツ、ニュージーランドのナーセリーを視察することができたという。それを通して日本での多種のシャクナゲ品種を「シャクナゲ写真集」（誠文堂新光社）として紹介している。

この頃、ご子息がアメリカでの研修を終え、一緒に始めている。そんな折、要請があって協同組合の理事に、後、組合長として就任された。組合長時代は食管制度の廃止があり、稲作専業農家にも園芸を取り入れた複合経営を勧め、そのために施設（予冷・保冷庫、出荷場等）の必要性を強調し、進められた。シャクナゲは以前ほど人気がなくなり、転換を含めて方向づけの必要性を感じ、3期で退任。そしてオーストラリアの植物に向かっていった。

最初は西オーストラリアのナーセリーを回り、いろいろ買い集めた。後で調べると大半が東オーストラリアかビクトリア州の原生種が多かった。西オーストラリアの植物は多湿気候の日本では難しいものが多いように思われた。

次はシドニー、メルボルンを主にナーセリーを訪ねた。原生種専門のところもある。5年にわたって導入した主なものは、ボロニア、ブラキカム、コーレア、クロウエア、ダンピエラ、エバククス、ハーデンベルギア、プロスタンセラ（ミントブッシュ）等々だが、実用性のあるものは4～5種類である。

これまでに数回オーストラリアへいって感じたことは、草生の植物はだいぶ改良が進み栽培に適したものが多くなったこと。だが花木のほうはあまり進んでいないように見受けられること。だが野生種で観賞価値のある地域としては特異で、改良され、園芸化が進めば、オーストラリア植物のブームがくるのではないかと夢を見ているようである。

今流行のクリスマスローズは地域ぐるみで、毎年新花を楽しんでおられる。また、クレマチスにも手を出し、相変わらず夢を食べているようである。

小さな生産者育種、導入試作を通して“楽しむ”を軸足として、地域の目線でともに歩み、後継者育成にご尽力されている。なお、戸定会では新潟の支部長をされている。

◘ 花葉会賞受賞者紹介

花卉園芸一筋、人生設計通りの素晴らしい生き方

神奈川県立フラワーセンター・大船植物園、34年間勤務―　木崎　信男　氏

熱　田　健

木崎氏は昭和12年、東京生まれ。都立西高を経て松戸を36年に卒業。私とは稲毛の教養課程時にあった、徒歩旅行部（ワンダーフォーゲルの方が通りが良い)と云うクラブ活動を通してのお付き合いです。と云っても3年遅れの私にとっては、正に雲の上の人的な存在。それでも何度か山行を共にしていただきました。

さて、ここに今回の受賞に当たって、氏が書かれた「我が花の人生」と云う小文がありますので、一部を紹介させていただきます。

『両親共埼玉の山の中育ち、そのためか庭でいろいろなものを栽培することが好きで、庭には大きなかぼちゃなどがなっていたりした。そんな環境とその後の「疎開」で母方の実家に行ったため、尚更自然の中で育ったことが大きな影響を与えたものと思います。終戦後東京に戻りましたが、矢張り狭い空き地で、小学生の頃から花を育てていました。

中高校の頃、私なりの人生の設計をし、それに沿って生きてきました。その根幹は、花を作る現場で生き、且つ安定を得ようという、まあ余り大きなものではありませんが。それには公務員が一番と考えていました (多分、県レベルの花の研究機関などを考えていたように思います)。

松戸を出るとき大船に「花の植物園」が出来ると聞いて、早速応募。農水省の一種で北海道の試験場にどうだとの打診も断り、大船に決めました (昭和36年卒です)。

開園前からの参画で、以後34年間大船に居りました。その間、幾たびもの移動打診も断り、居続けていましたが、「此処に居続ける者を所長にはしない」と云うルール？と、そんな古狸がいては他所から所長を連れてくるのが難しいと言う理由から、ついに最後の3年は肥飼料検査所に転勤させられ、植物園から離れました。

定年後は公園協会で園芸相談員をする傍ら、ある会社が派遣する、園芸講師の「養成」にも携わり、現在も講師養成を続けて携わっています。

我が人生は花を中心とした設計通りに過ごしてくることが出来、花に感謝の現在です。』

これを読むだけで、花一筋に精進してこられた氏のプロフィールはおおよそお解りでしょう。植物園在職中は運営の企画、園芸相談の対応、相談員の育成から植物の栽培と施設の管理等あらゆる現場での実際の活動を惜しみなくされていました。

氏はやはりバラがお好きだそうで、自分でプランニングしたバラ園の管理は剪定作業を始め、殆ど一人でなさったようです。そして閉園後の夕方、トワイライトに映えるバラの特別な美しさを独り占めして楽しんでいました。「バラは数年も心血をそそいでやると、向こうから挨拶をしてきますよ」と、嬉しそうに語られます。

また季節の企画のキクの展示では、数十人の作家の作品が鉢を見ただけでほぼ見分けられたそうです。

施設の面では、温室内の空気は絶えず動いてなければならないという持論を実践すべく、従来の頂部の蝶番による開閉窓は換気能力に限界があり、さらに効率をよくする為にスライド式のベンチレーターを提案してよい結果を得ているといいます。

このようなエピソードは沢山あり、とても書ききれません。更には執筆の方も精力的になされ、出版社との繋がりがりもできていたのですが、目立ち始めると「公務員の兼業は望ましくない」等の批判？　が出始めたので、その後は控えたそうです。それでも幾つかの出版物があります。

池田書店から清水基夫氏との共著で『観葉植物』。誠文堂新光社のガーデンライフシリーズ『一、二年草』、『宿根草』を19名の共著で執筆。世界文化社『庭で育てる茶花の図鑑　風炉編』を岡部誠氏との共著で出版。この他雑誌のコラムや寄稿は数え切れない程だそうです。

思いつくままに木崎氏の紹介文を書きましたが、肝心な何かが書けていないような気がします。静かですが、とにかく凄い人です。極端に表に出たがらない、目立つ事を避ける性格のために受賞が遅れたのだと思いますが、氏の花卉園芸界に及ぼした影響、成果は、計り知れないほど大きなものであったと信じています。

温室の窓。屋根は片流れになっていて、一番高いところに窓が開くようになっている。一番低い位置にも窓があり、入った空気は上に上がって屋根に添って流れ一番高いところから出て行く。空気の流れが良く、高温に成りにくいような設計にしようと考えた

◘ 花葉会賞受賞者紹介

計画を持ち実行する人　村川文彦さん

村　井　千　里

村川文彦さんを推薦した私だが、あまり深くおつきあいをしたことはない。ただ、埼玉県の試験場研究員と農高の先生という関係で、その人となりは花卉生産農家を通して存じ上げていた。

私が生産の問題点を聴き取りに入った川里、鴻巣、深谷、児玉地方の花卉生産農家の経営主やご子息が村川先生の薫陶を受けた人々であったからである。

埼玉県戸定会支部の理事会や総会で親交を重ね、現在はテクノホルティ園芸専門学校での片腕になっていただき、「花を作る」「花をより美しく、刹那の一時を飾る」という教育に取り組んでいる。

このことを通し、実践の人、村川さんをよく知ることができ、推薦に誤りなしと自信をもって紹介できる喜びを味わっている。

なにしろ、どぶ川に入って土手の除草を実践してしまう先生には、現代気質の学生達を無言のうちに勤勉の意識を植えつけられてか、まったく素直に実習に励んでいる。お陰さまで、私の方は細かな種子の育苗に、温室管理に専念でき、徐々に、「本当に生産を学ぶ」という、古臭くても現代に重要な農学校を推進できるだろうと、後期高齢者が幸期高齢者として活動する意欲をもらっている。

なにしろ、学校周辺（といっても半径20㎞）の著名な花卉農家は村川さんの教え子であるし、私が昔、直接技術の交換を重ねてきた人々であるからだ。

野球と農業プロジェクト発表にかける

千葉大学野球部に在籍し、高校で野球部の顧問という実績で、クラブ活動にも力を入れながら、全国の農業高校のプロジェクト･コンテストに力を注ぎ、県代表、関東代表、全国優勝と若き学徒に刺激を与えてきた。この成果が農高生を文学教授に育て、全国屈指の花卉生産農家として成長させている。

英語を学ぶことは花卉園芸の基本

村川さんに正すと笑っているが、教え子たちの中には伝説のこととして知られ、それに刺激され実行した人もいる。

「英語の辞書を食べた」と、英語の担当でない村川先生の一言に、英語に力を入れ、負けじと辞書を食べたという方に出会った。何事にも研究熱心で、ゴールドクレストの苗作りでは一番、ポットガーベラの育種でオリジナルな生産組織を作り出している。

辞書を全部食べたかは聞き損なったが、ヨーロッパ視察に同行したが、積極的に質問したりして何かを掴み取っていこうとする意欲十分な意気込みが見られた。

ここにも実行力の威力と、それに感化する生徒の意気、まさにこれが教育であろう。

平成11年より、母校の「農業科教育法」の非常勤講師となったが、当を得たもので、実践力を学ぶ講師としては、他に類を見まい。

急激に変った花卉園芸教科への対応

農業教諭になって3年目には、埼玉県「園芸学科」新設ための設置委員会の重責を担う。その後、高校教育の多くの分野での委員を歴任して、羽生実業高校に「実業経済科」を全国に先がけて設置し、科長・農場長の要職に。その間に、草花園芸の指導内容に対応した実践を行い、「施設園芸」「草花」の教科書及び指導要領の鉢花部門を担当執筆した。

県内３農高の教頭を経て、杉戸農業高校を３年間勤めて勇退された。

読書する人

読書家として知られ、教員採用試験には愛読書はどう答えるかを検討しておられたほど。中島敦の作品や奥の細道は、目で読むほかに、テープで聞き、多くの作品をそらんじている。このような文学的な素養は,単に農業技術の指導の中でも、滋味として働き、講義の内容を深めている。

とくに、ふかやのオープンガーデンの指導には、人々と深いかかわりを持つ上でも、読書の幅広さが役立っているのではと思っている。

◘ 花葉会賞受賞記念講演

高等学校・農業教育における「草花園芸・草花」の指導の変遷、及び「ガーデンシティ　イン　ふかや」の指導

村　川　文　彦

講演中の村川氏

農業の近代化推進のために、「農業基本法」が制定されたのは昭和36年である。農業後継者の育成と確保が大きな問題としてクローズアップされた時代に、埼玉県立熊谷農業高等学校の「草花園芸」担当教員としてスタートした。

草花園芸は守備範囲が広く、①造園部門、②切花、球根、花壇苗生産部門、③鉢花、観葉植物、洋ラン部門に分かれ、私は③を担当。次の4つをテーマとした。1基礎的・基本的内容の重視、2実験・実習の重視、3農業後継者の育成、4学校農業クラブ活動の推進。

当初、生徒は野菜が中心の農家の長男が7割、だが花を中心とした経営を教えた。「シクラメン中心の輪作体系の確立」の中で、シクラメンについての基礎的・基本的な知識と技術を習得し、実験・実習のプロジェクト学習を中心にすえて学習を展開。1年では基礎を、2年では栽培を、3年では企業的経営を目標とした。そして農業後継者の育成のために、寝食をともにした宿泊実習の実践し、全人的な教育を行った。

昭和44年、生徒だけでなく自分自身も学ぶために、千葉大学園芸学部に再度入り、農業技術や経営能力の技術革新等について、1年間研修を重ねた。

なお、学校農業クラブ活動は草花園芸の専攻学習を活発化して、「指導性を高める、社会性を高める、科学性を高める」ことを目的にプロジェクト学習を推進。教育効果を高めることをねらいとした。昭和54年には学校農業クラブ全国大会を埼玉県熊谷市で開催した。

高等学校・農業教育における「草花園芸・草花」の指導の変遷

昭和23年度実施の学習指導要領は新制高校における農業教育の再建期（昭23～26年度）であった。その後、7回にわたって学習指導要領が出され、目標も内容も変遷していった。昭和38～47年度は高等学校農業教育の近代化・拡充期、48～56年度は農業教育の近代化・集約期、57年～平成5年度は再生期、平成6～15年度は再編期であった。そして16～25年度は拡充・発展期となるだろう。

高等学校教育の目標は、自ら学び・自ら考え、生きる力を育成して人格を完成させること。そして専門性の基礎・基本の確実な習得で社会の形成者を育成して、農業各分野の変化へ対応することである。

「ガーデンシティ イン ふかや」の指導

わが国は活力ある国家として発展し、科学技術創造立国・文化立国等を目指している。また、「都市と農山漁村の共生・対流推進会議」が発足。これらを受けて、深谷市では「花サミット・花フェスタ」の目的を、先進的な地域づくりに取り組んでいる花づくりの市町村が一堂に会して情報交換をし、交流を深めてゆくことであるとした。深谷市役所・ガーデニング推進室に事務局を設置し、推進母体とした。

①Beautiful Life　②Beautiful Community　③Beautiful Country、この三つの美を実現するためのまちづくりの指針とする。この指針を基に、深谷市から全国へ、そして世界へ発信していくものである。

2004年10月15～17日、第1回ふかや花フェスタ（第4回全国ガーデニングサミット in ふかや）を開催。以降毎年4月に行われている。そして2009年は名前を変え、「花とみどりの王国」と題して行われる予定である。

キーワードは「愛・創・育」。すなわち、愛する：花を愛し、緑を愛し、「ふかや」を愛する心を育む。創る：美しくなければ街ではないをモットーに、花と緑のあふれるまちを創る。育む：現存する自然緑地・生産緑地を守り育み、自然と共存するまちづくりの推進である。里親制度の導入、職員ボランティア活動の推進、小中高等学校等「ふかや花いっぱい運動」の推進、園芸療法の目的別推進、オープンガーデンなどの事業が展開されている。（レジュメより抜粋　文筆：編集部）

卒業 科年	氏　名	郵便番号	住　　所	電話番号	勤務先（名称のみ） 訂正箇所

6　物故者

園昭２３　柴沼　弘
別昭２４　浅岡　敬介
別昭３２　石井　修
園昭３５　植松　盾次郎
農昭３８　遠藤　宗男

7　訂　正

園昭３２　時田　勉　　園昭３９→園昭３２　　No.26 P.60上1

8　お願い

住所、勤務先などに変更がありましたら、すぐに事務局までご連絡ください。
連絡先：〒271-8510　松戸市松戸648　千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内「花葉会」事務局　TEL:047-308-8810

園芸学部１００周年記念事業について

田　中　桃　三

園芸学部の100周年は来年2009年に到来します。そのために、戸定会と園芸学部で100周年記念事業会を結成、募金活動や記念事業の計画及び実施を行っています。私はたまたま事業会の中の展示第２委員会の委員に指名されたので、私が承知している範囲について報告いたします。

募金については、総額2億円を目標に、2005年12月より2010年3月まで行われています。2008年春の時点で1億３千万ほど集まったそうですが、目標にはまだ達していません。皆さんの一層のご努力をお願いしたいとのことです。

さて記念事業の件ですが、最初は100周年記念館の新築と庭園の改修、記念式典、祝賀会、100年史の発行、学術振興、記念展示会の開催などを予定し、基本設計などの準備なども進めていました。しかし、本年3月に学部の西千葉移転の問題が発生。記念事業を予定通り進めるべきかが議論となりました。結局のところ、記念館事業は移転問題がはっきりするまで中止することにしました。しかし、他の事業は継続して進めることになりました。なお、移転問題については戸定会とは関係なく、遅くとも来年3月までに、園芸学部が態度を決定して決まるものと思われます。

さて第２委員会の仕事ですが、当初は故岩佐吉純氏の蔵書の一部と故岩佐亮二氏の浮世絵のコレクションを中心にした展示会を予定していたのですが、会場の記念館の建設が延期されたため、学部の隣にある松戸市の戸定歴史館を借用して開催することになりました。

しかし会場の照明や期間の問題から岩佐亮二氏の浮世絵は展示が難しいとの結論にいたり、結局岩佐吉純氏の蔵書を中心とした展示をすることになりました。

展示の内容については横井先生を中心に選んでいますが、以前花葉会総会で岩佐さん自身がお見せした書籍などになるものと思われます。

会場のレイアウトや展示パネルの作成はNHKアートにお願いをしています。展示期間は来年10月15日～11月14日を予定しています。

次に第１委員会で扱っている総括展示ですが、これは園芸学部の100年の歩みと現状(教育活動と研究成果)及び学部の未来への展望を展示するものです。今のところ、Ａ棟1階の製図室を予定しています、

展示の内容については目下人物、紹介する事業の内容等を検討しているところですが、当然花卉関係者も含まれていることと思います。

以上まことに簡単ですが、私の知り得たことをご報告いたしました。

会報「花葉」発行にともなう協力金のお願い

日ごろより花葉会の事業にご協力いただきましてありがとうございます。深く感謝いたしております。

さて、花葉会では、千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室を中心に、花卉産業界に携わる会員相互の親睦、研鑽と情報交換を目的に、会報「花葉」を発行してまいりました。

本来この会報の発行は、広告料収入により、印刷・郵送費等を充当し、会員の皆様には無料で配布することにしてまいりました。しかし、昨今の経済情勢のため、広告収入は減少し、資金的に逼迫しているのはご周知のことと存じます。

そこで、私どもといたしましても一層の合理化をはかり冗費の節約につとめる所存ですが、会員、読者の皆様には協力金の拠出をお願いする次第です。

また、今後とも「花葉」の内容につきましてはさらに充実させ、会の活動も一段と活発にしてゆくつもりですので、ご理解のほど、なにぶんにもよろしくお願いいたします。

なお、ご送金につきましては、同封の郵貯銀行振替用紙にて、下記の要領でお願いいたします。

花葉会幹事一同

1.振替口座番号：00150-9-13341　口座名：花葉会
2.花葉会会報「花葉」発行協力金　３カ年分として　5,000円（「花葉」27号～29号）
3.問合せ先：〒271-8510　松戸市松戸648　千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内　花葉会事務局
TEL＆FAX:047-308-8810

編　集　後　記

◆27号も多方面から貴重な原稿をお寄せいただき､ありがとうございました。深く感謝いたしております。

◆不況の大きな波を感じさせられる一年でした。ごく身近なところでは本誌「花葉」の広告収入が減少したこと。サマーセミナーは赤字であったこと。

◆さらに大きい波は、業界に押し寄せる重油高騰によるコスト高、アメリカの金融不況に端を発した世界的な不況等々。重油高騰は秋になって落ち着きを取り戻したものの、不況による需要の落ち込みは出口が見えないと聴くと心配です。来年こそ、よい年でありますように。

◆「アメリカに変化がやってきた」と宣言したのはオバマ氏ですが、変ってほしいのは日本も同じ。いえ、変えなくてはいけないのだと思います。

◆今年の総会風景が少し変りました。記録用にカメラを預けたのですが、まあ、楽しそうな顔がたくさん映っていました。幹事交代で若い幹事が入ってくれたこと、1000属検定の認定証授与があったために学生の参加があったことが大きいのだと思います。花葉会にも新しい風が吹きますように！

◆『花葉』の経費は、掲載していただく広告料と会員の皆様の協力金でまかなっております。ご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

◆花葉会ホームページhttp://www.kayoukai.net/からも『花葉』を読むことができます。また､『花葉』への寄稿は、ホームページを経由して、花葉会事務局宛でどうぞ。

花　葉　2008　No.27
平成20年12月10日発行

発行人　安藤敏夫
編集人　山田幸子
発行所　花　葉　会

〒271-8510　松戸市松戸648　千葉大学 園芸学部 花卉園芸学研究室内
http://www.kayoukai.net/
編集　㈲フローラルプランナーズチーム
製版・印刷　㈱インタラクション